

# 筑後西部第2地区遺跡群(IV)

福岡県筑後市大字水田所在

県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

筑後市文化財調査報告書

第34集

2001

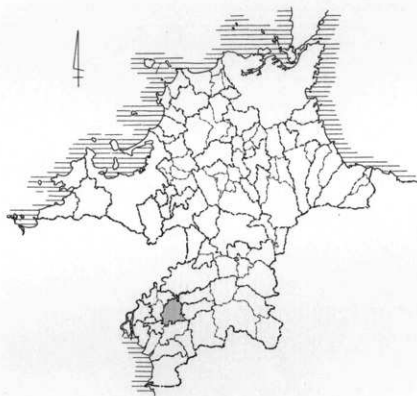
筑後市教育委員会

# 筑後西部第2地区遺跡群(IV)

福岡県筑後市大字水田所在

県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

- ・水田下<sup>ひら</sup>平<sup>れい</sup>靈<sup>いし</sup>石遺跡
- ・水田上<sup>ひら</sup>平<sup>れい</sup>靈<sup>いし</sup>石遺跡(第2次調査区)
- ・水田上<sup>にら</sup>仁<sup>ら</sup>良<sup>ぼ</sup>葉遺跡(第1次・第2次調査区)



2001

筑後市教育委員会

## 序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より農耕の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより歴史を刻んできました。

筑後西部第2地区遺跡群の発掘調査は、県営担い手育成基盤整備事業に伴い、平成8年度から10年度にかけて、福岡県筑後川水系農地開発事務所の委託を受け、実施されたものであります。

このたび報告する水田地区は筑後市の南部に位置し、水田天満宮を中心として栄えた門前町として、また筑後市の伝統工芸のひとつである水田焼が行われた場所として知られています。この地区では南部を中心に埋蔵文化財の発掘調査が行われており、主に弥生時代の遺跡が広がっていることが明らかとなってきました。今回の報告でも主に弥生時代の遺跡の報告がなされております。

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで、福岡県筑後川水系農地開発事務所の関係者、各関係機関、工事関係者、有識者各位には多大なご協力とご援助を賜りました。ここに心から感謝を表する次第であります。

本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。

平成13年3月

筑後市教育委員会

教育長 牟田口 和良

# 例 言

1. 本書は、県営担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区に伴い、福岡県筑後川水系農地開発事務所の依頼を受けて、筑後市教育委員会が平成10年度に大字水田において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺物実測図は永見秀徳・小林勇作・立石真二・奥村太郎・末吉隆弥が制作し、浄書は立石がこれを行った。
3. 本書使用の遺物実測図は立石・平塚あけみ・徳永みどり・高田知恵が制作し、浄書は立石がこれを行った。
4. 本書使用の写真は主に永見・立石が撮影した。なお遺跡の気球写真は衛星空中写真企画に依頼した。
5. 本書の標高は海拔高であり、方位はG.Nである。
6. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。また遺構の呼称については土壌をSK、溝状遺構をSD、井戸をSE、柱穴をSP、不明遺構をSXと記号化した。
7. 本書に掲載した遺物の尺度は土製品は1/3、石製品は1/2を基本とする。
8. 本書の執筆、編集は立石がこれを行った。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は、筑後市教育委員会にて保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

# 目 次

第1章	はじめに	1
第2章	位置と環境	5
第3章	水田下平曇石遺跡の調査	13
第4章	水田上平曇石遺跡 第2次調査	17
第5章	水田上仁良葉遺跡 第1次調査	35
第6章	水田上仁良葉遺跡 第2次調査	39
第7章	結語	47

# 第1章 はじめに

## 1 調査に至る経過

筑後市の南西部には矢部川により形成された低位段丘と沖積平野が広がり、農業を中心とした産業が営まれている。この地域は稲麦を中心とした二毛作が行われる穀倉地帯であるが、近年の農業構造の変化に伴い蔬菜ハウス栽培が導入され、農業経営の多様化が進んでいる。しかし、この地域特有の用排水兼用のクリークが迷走するために圃場の地下水位が高く排水不良なことに加え、道路も狭小かつ未整備なため農業機械の導入が困難な状況であった。

これに対し農業の近代化、合理化による農業所得の増大を目的として、県営担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区計画が、福岡県筑後川水系農地開発事務所（以後「甲」とする）により行われることとなった。事業は平成6年度に全体計画が実施され、平成7年度に県営事業として採択された。事業は筑後市大字常用（7工区の一部と9工区）、同大字津島（7・11工区の一部と8工区）、同大字志（11・13工区の一部と12工区）、同大字尾島（13工区の一部）並びに山門郡瀬高町大字本郷（1～6・14工区）および、総面積157haの田畑を対象に行われることとなった。

平成7年、「甲」より筑後市教育委員会社会教育課社会教育係（現文化係、以後「乙」とする）に対し、埋蔵文化財に関する申請がなされた。「乙」では麦の収穫の終了を待ち、平成8年6月より、平成8年度事業対象地域（7工区）において、止むを得ず削平を受ける部分に対し試掘調査を行った。その結果、弥生時代を中心とした遺跡の存在が確認された。この結果を受け両者は協議を行い、予算、日程等を調整し、発掘調査を行うこととなった。この間も試掘調査は引き続き行われた。調査は常用日田行遺跡第2次調査の遅れから、平成9年5月に終了した。

平成9年4月、「甲」より「乙」に対し、平成9年度事業対象地域（8～13工区）に対する埋蔵文化財に関する申請がなされた。これを受けて「乙」は道路および削平を受ける部分に対し、業務が可能な地区から随時試掘調査を行った。その結果、津島地区では弥生時代を中心とする遺跡を、そのほかの地区では中世から近世にかけての遺跡の存在を確認した。両者は協議を行い、発掘調査を実施することとなった。途中、津島北石伏遺跡、津島皿ヶ町遺跡の調査の遅れに伴い日程を再度協議し、平成10年4月、調査を終了した。

平成10年4月、「甲」より「乙」に対し、平成10年度事業対象地域に関する埋蔵文化財の問い合わせがなされた。事業の対象地域は筑後市大字水田で、15工区として新たに圃場整備事業に加わった地域である。これに対し「乙」では試掘調査を行い、弥生時代を中心とするものと、中世から近世を中心とする遺跡とを確認した。この結果を受け両者は協議を行い、やむを得ず削平を受ける部分について発掘調査を行うこととなった。調査は地権者の要望もあり、水田上平雲石遺跡第1次調査区より行われた。この間行われた調査対象区外での耕作土の除去に伴い多くの廃棄土壌が露出し、埋め戻し保存のため重機での走行を規制するなどの対応を行った。また、調査区北側において甕棺墓が確認され、新たに調査対象に加えることとなった。水田上平雲石遺跡第1次調査区の終了後、調査団を2班に分け、それぞれ水路部分の調査に取りかかった。第1班は水田上仁良雲石遺跡の調査を行い、その後甕棺墓（水田上平雲石遺跡第3次調査区）の発掘を行った。第2班は水田下平雲石遺跡の調査後、水田上平雲石遺跡第2次調査区の発掘を行った。調査は平成10年11月に全日程を終了した。

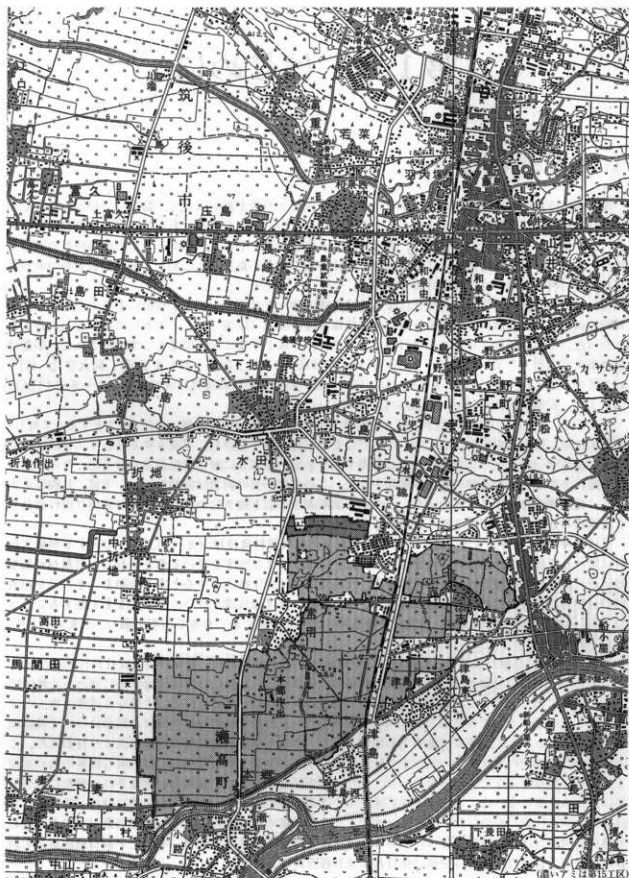


Fig. 1 西部第2地区遺跡群 位置図 (S=1/25,000)

## 2 調査組織

西部第2地区遺跡群(15工区)の調査は、以下の体制で行われた。なお、筑後市教育委員会社会教育課社会教育係は機構改革に伴い、平成11年度より文化係と改称している。

調査主体	筑後市教育委員会					
教育長	森田 基之(～平成11年3月)					
	牟田口和良(平成11年4月7日～)					
教育部長	津留 忠義(～平成11年3月)					
	下川 雅晴(平成11年4月～)					
社会教育課長	山口 逸郎(～平成11年3月)					
	庄村 國義(平成11年4月～)					
社会教育係長	田中 清道(～平成11年3月)					
文化係長	田中 僚一(平成11年4月～平成12年3月)					
	成清 平和(平成12年4月～)					
文化財専門職	永見 秀徳(第1班調査担当)		小林 勇作		田中 剛(～平成11年3月)	
	上村 英士					
文化財学芸員	柴田 剛 立石 真二(第2班調査担当)					
調査作業	大坪 芳典		中尾 洋一(別府大学)		野間口琢郎(同志社大学)	
	池末 桂子	石橋香代美		井上むつ子	牛島 容子	江崎 未廣
	江崎トシ子	大田黒三枝		大塚 政夫	小野カトリ	加藤 礼子
	梶島美恵子	藩池 京子		北島 清	古賀 明美	近藤 都
	角 里子	瀬戸八重子		田島ヤス子	田島 好江	田中ミドリ
	田中 峰子	壇 ちゑ子		鶴 芳輝	東 末子	富安 英子
	深町 順子	深町美智子		平尾 仁子	村上 幸子	矢次 和枝
	吉開 朝子	吉田喜美子		渡辺 茂喜	渡辺 泰子	
調査作業協力	奥村 太郎		末吉 隆弥(現川崎町教育委員会)			
整理補助員	江崎 玲子		平塚あけみ			
整理作業	徳永みどり		仲 文恵		野口 春香	野間口靖子 馬場 敦子
	湯川 琴美		横井 理絵			
整理作業協力	高田 知恵					

また、今回報告の遺跡の調査に際し、福岡県筑後川水系農地開発事務所、各工事関係業者より多大なご協力を頂いた。また、下記の方々からは調査・整理作業に関してご教示・ご指導を賜わった。記して謝意を表したい(順不同・敬称略)。

佐田 茂(佐賀大学)、佐々木隆彦(福岡県教育庁文化財保護課)、小田 和利(福岡県教育庁南筑後教育事務所)、大塚 恵治(八女市教育委員会)、塚本 映子(三浦町教育委員会)、田中 康信(瀬高町教育委員会)、尾崎源太郎(広川町教育委員会)、山田 元樹(大牟田市教育委員会)、近藤 光男(水田焼光窯)、久留米市教育委員会





## 第2章 位置と環境

### 1 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

### 2 歴史的環境

#### 1) 筑後郷土史研究会による調査

水田地区周辺は遺跡の密集地帯であり、明治26年、鹿児島本線架設の際に甕棺墓群と「花立状土器」（弥生中期の筒型器台のことか）が出土したことが伝えられている。このほかにも昭和20年代より地元の筑後郷土史研究会を中心に弥生時代を中心とした遺跡の調査や遺物の採集が行われている。これらは筑後郷土史研究会がまとめた「水田校区郷土史」（昭和56年、右田乙次郎編）に詳しい。これによると今回の調査対象となった平盤石、これと水路を挟んだ北側の居流（居庵）において甕棺墓（支石墓の可能性もある）が確認されている。また、集落の存在をうかがわせるものとしては居流において炉址が4基確認されている。その他には大字水田字山伏では土器焼成跡、水田天満宮社殿の後から朱詣の大石棺の発見等がある。大字上北島字平塚では金環のほか須恵式（須玖式か）かめ棺、副葬品に小急須型土師、石製模造品が出ている。

#### 2) 筑後市教育委員会による調査

筑後市教育委員会が実施した埋藏文化財発掘調査は現在150件を超えている。特に水田・常用地区は住環境の整備や度重なる圃場整備事業（筑後西部地区・筑後西部第2地区）によって、市内でも発掘件数の多い地区のひとつとなっている。周辺での代表的な遺跡は梅島遺跡（集落跡、弥生中期～後期）、常用日田行遺跡（集落、縄文末～弥生前期）、常用長田遺跡（集落、縄文時代末～弥生時代中期前半）、水田山伏遺跡（集落、弥生時代）、水田杉ノ元遺跡（集落、弥生時代中期～後期）がある。

#### 【参考文献】

右田乙次郎	『水田校区郷土史』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1981
水見 秀徳	『梅島遺跡 第1次調査』	筑後市教育委員会	1992
筑後市教育委員会・編	『ちくご遺跡だより』No.1～31	筑後市教育委員会	1996～2000
小林 勇作	『長崎坊田遺跡』	筑後市教育委員会	1999
小林 勇作・水見 秀徳	『筑後西部地区遺跡群 II』	筑後市教育委員会	2000

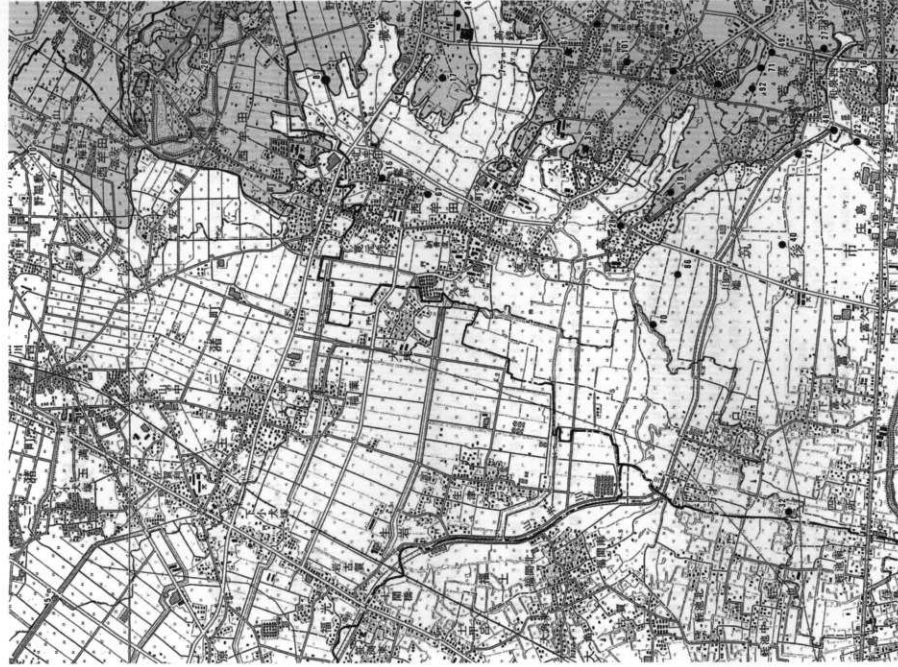


Fig. 3 筑後市内埋蔵文化財発掘調査地点位置図1 (S=1/25,000)

平成12年4月1日現在



筑後市内埋蔵文化財発掘調査地点位置図2 (S=1/25,000)

平成12年4月1日現在

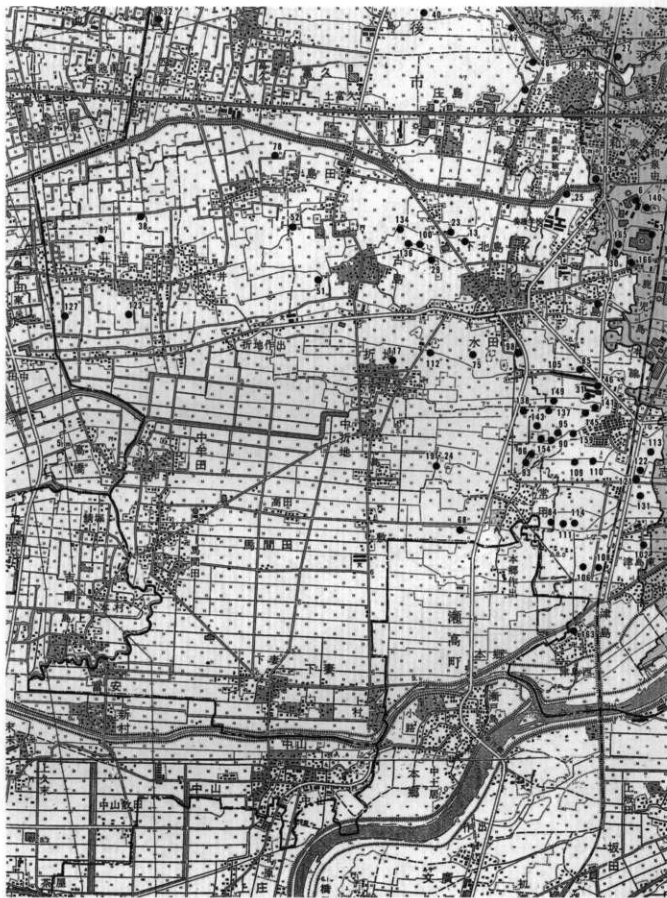


Fig. 5 筑後市内埋蔵文化財発掘調査地点位置図3 (S=1/25,000)

平成12年4月1日現在



Fig. 6 筑後市内埋蔵文化財発掘調査地点位置図4 (S = 1/25,000)

平成12年4月1日現在

【備考】  
 ・通称の一調音地点 (括弧内参照)  
 ・同音異名・平仮名・片仮名 (括弧内参照) 3月及び12月で登録した通称は  
 登録時名(平仮名)と4月1日現在使用している通称

通称No.	通称名	新通称名	所在地	通称期間	通称の時代・性別 (特記事項)	備考
1	石山古通	石山古通	高橋市大字前津中村		前津中津 (旧国定通称)	
2	泰山古通	泰山古通 (第1次調査)	上北高平町	1982年 - 1983年	鶴一(男)・葛島 (男性住居など)	鶴一 (第1集)
3	丸山古通	丸山古通	上北高平町	1989年04月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	(第2集)
4	堀上平通	堀上平通	西野町	1981年01月	鶴一(女)	(第3集)
5	藏敷野原古通	藏敷野原古通 (第1次調査)	藏敷市野原	2005年04月	鶴一(女)・葛島 (鶴一集)	第4集
6	井原古通	井原古通	上北高平町	1985年06月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	第4集
7	田中平五通	田中平五通 (第1次調査)	津浦町	1985年12月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	第4集
8	田中通	田中通	北平町	2007年11月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	第5集
9	蔵敷・本通	蔵敷・本通 (第1次調査)	蔵敷市蔵敷	1988年03月 - 06月	鶴一(女)・葛島・中津・葛島 (男性住居など)	第6集
10	丸山通	丸山通	高平町	1989年01月 - 03月	鶴一(女)・葛島・中津・葛島 (男性住居など)	第7集
11	丸山古通	丸山古通	津浦町	1989年07月 - 08月	5月結婚・前津中津 (旧国定通称)	第8集
12	上北高通	上北高平通	上北高平町	1989年07月 - 09月	鶴一(女)・葛島 (鶴一集)	第10集
13	下北高通	下北高平通	下北高平町	1989年09月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (鶴一集)	第10集
14	蔵敷・本通	蔵敷市・本通 (第2次調査)	蔵敷市蔵敷	1989年11月 - 06月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	第11集
15	丸山通	上北高平通 (第2次調査)	上北高平町	1989年03月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	(既出)
16	野中通	西野町野中	西野町野中	1990年06月 - 08月	中津・区国定など	(既出)
17	蔵敷古通	蔵敷古通	蔵敷市蔵敷	1990年07月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (鶴一集)	
18	丸山通	津浦町丸山	津浦町丸山	1990年09月 - 1991年03月	中津・葛島 (丸山集)	
19	丸山通	丸山通 (第1次調査)	丸山通	1990年11月 - 09月	鶴一(女)・葛島 (丸山集)	1992年
20	津浦平五通	津浦平五通 (第1次調査)	津浦町平五	1991年06月 - 08月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	
21	平五通	上北高平通	上北高平町	1991年07月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	
22	田中通	高崎町田中	高崎町田中	1991年09月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (田中集)	第23集
23	丸山通	下北高平通	下北高平町	1991年09月 - 1992年02月	鶴一(女)・葛島 (鶴一集)	
24	丸山通	丸山通 (第2次調査)	丸山通	1991年12月 - 1992年04月	鶴一(女)・葛島 (丸山集)	第29集
25	下北高通	下北高平通	下北高平町	1992年02月 - 06月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	第30集
26	丸山平五通	丸山平五通	丸山平五通	1992年04月 - 05月	鶴一(女)・葛島 (丸山平五集)	鶴一集 108集
27	若菜通	若菜平五通	若菜平五通	1992年04月 - 1993年06月	鶴一(女)・葛島 (若菜平五集)	
28	高江通	高江通	高江通	1992年05月 - 07月	鶴一(女)・葛島 (高江集)	鶴一集 109集
29	蔵敷通	下北高平通	下北高平町	1992年07月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (鶴一集)	第9集
30	上北高通	上北高平通 (第1次調査)	上北高平町	1992年09月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	
31	津浦平五通	津浦平五通 (第1次調査)	津浦町平五	1992年10月	鶴一(女)・葛島 (男性住居など)	第33集
32	西・丸山・西通	西・丸山・西通	西・丸山・西通	1992年12月 - 1993年02月	鶴一(女)・葛島 (西丸山集)	第38集
33	鶴田平五通	鶴田平五通 (第1次調査)	鶴田平五通	1993年04月 - 09月	鶴一(女)・葛島 (鶴田集)	第11集
34	新津丸山通	新津丸山通	新津丸山通	1993年06月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (新津丸山集)	第11集
35	鶴田平五通 (第1次調査)	鶴田平五通 (第1次調査)	鶴田平五通	1993年08月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (鶴田集)	第11集
36	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1993年08月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第11集
37	鶴田丸山通	鶴田丸山通	鶴田丸山通	1993年10月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (鶴田丸山集)	第11集
38	津浦西平五通	津浦西平五通	津浦西平五通	1993年11月	鶴一(女)・葛島 (津浦西平五集)	第15集
39	鶴田平五通 (第1次調査)	鶴田平五通 (第1次調査)	鶴田平五通	1993年12月 - 1994年03月	古代・鶴一(女)・葛島 (鶴田平五集)	第16集
40	若菜平五通	若菜平五通	若菜平五通	1994年04月 - 07月	鶴一(女)・葛島 (若菜集)	第16集
41	鶴田平五通 (第2次調査)	鶴田平五通 (第2次調査)	鶴田平五通	1994年04月 - 06月	鶴一(女)・葛島 (鶴田平五集)	第16集
42	蔵敷丸山通	蔵敷丸山通	蔵敷市蔵敷	1994年05月 - 06月	鶴一(女)・葛島 (蔵敷丸山集)	第17集
43	丸山通	丸山通 (第1次調査)	丸山通	1994年06月 - 07月	鶴一(女)・葛島 (丸山集)	第33集
44	丸山平五通	丸山平五通	丸山平五通	1994年06月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (丸山平五集)	鶴一集 124集
45	丸山丸山通 (第1次調査)	丸山丸山通 (第1次調査)	丸山丸山通	1994年07月 - 08月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第17集
46	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通	1994年07月 - 08月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第17集
47	若菜丸山通	若菜丸山通	若菜丸山通	1994年07月 - 10月	鶴一(女)・葛島 (若菜丸山集)	第17集
48	若菜丸山通	若菜丸山通	若菜丸山通	1994年08月 - 10月	鶴一(女)・葛島 (若菜丸山集)	第16集
49	若菜丸山通 (第1次調査)	若菜丸山通 (第1次調査)	若菜丸山通	1994年08月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (若菜丸山集)	第16集
50	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通	1994年08月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第17集
51	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1994年09月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第17集
52	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1994年09月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第17集
53	丸山丸山通 (第1次・第2次調査)	丸山丸山通 (第1次・第2次調査)	丸山丸山通	1994年09月 - 1995年03月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第17集
54	鶴田平五通 (第4次調査)	鶴田平五通 (第4次調査)	鶴田平五通	1994年10月	鶴一(女)・葛島 (鶴田平五集)	第17集
55	新津丸山通	新津丸山通	新津丸山通	1994年10月 - 1995年03月	鶴一(女)・葛島 (新津丸山集)	第17集
56	鶴田平五通 (第2次調査)	鶴田平五通 (第2次調査)	鶴田平五通	1994年11月 - 1995年03月	鶴一(女)・葛島 (鶴田平五集)	第17集
57	丸山丸山通 (第1次調査)	丸山丸山通 (第1次調査)	丸山丸山通	1994年11月 - 1995年07月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第17集
58	丸山丸山通	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通	1994年11月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第33集
59	西平五通	西平五通	西平五通	1994年12月 - 1995年01月	鶴一(女)・葛島 (西平五集)	
60	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通	1994年12月 - 1995年02月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第17集
61	蔵敷丸山通 (第1次調査)	蔵敷丸山通 (第1次調査)	蔵敷市蔵敷	1995年04月 - 05月	鶴一(女)・葛島 (蔵敷丸山集)	
62	蔵敷丸山通 (第2次調査)	蔵敷丸山通 (第2次調査)	蔵敷市蔵敷	1995年04月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (蔵敷丸山集)	
63	蔵敷丸山通 (第3次調査)	蔵敷丸山通 (第3次調査)	蔵敷市蔵敷	1995年07月 - 09月	鶴一(女)・葛島 (蔵敷丸山集)	
64	丸山丸山通 (第1次調査)	丸山丸山通 (第1次調査)	丸山丸山通	1995年07月 - 09月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
65	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通 (第2次調査)	丸山丸山通	1995年07月 - 09月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
66	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1995年08月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
67	西平五通丸山通	西平五通丸山通	西平五通丸山通	1995年08月 - 09月	鶴一(女)・葛島 (西平五通丸山集)	第35集
68	丸山丸山通 (第3次調査)	丸山丸山通 (第3次調査)	丸山丸山通	1995年08月 - 09月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
69	鶴田丸山通	鶴田丸山通	鶴田丸山通	1995年08月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (鶴田丸山集)	第35集
70	高江丸山通 (第1次調査)	高江丸山通	高江通	1995年09月 - 11月	鶴一(女)・葛島 (高江丸山集)	第35集
71	若菜丸山通 (第1次調査)	若菜丸山通 (第1次調査)	若菜丸山通	1995年09月 - 1996年03月	鶴一(女)・葛島 (若菜丸山集)	第35集
72	鶴田丸山通 (第2次調査)	鶴田丸山通 (第2次調査)	鶴田平五通	1995年10月 - 12月	鶴一(女)・葛島 (鶴田丸山集)	第35集
73	鶴田平五通 (第1次調査)	鶴田平五通 (第1次調査)	鶴田平五通	1995年10月 - 1996年03月	古代・鶴一(女)・葛島 (鶴田平五集)	第35集
74	丸山丸山通 (第3次調査)	丸山丸山通 (第3次調査)	丸山丸山通	1996年01月 - 02月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
75	丸山丸山通 (第4次調査)	丸山丸山通 (第4次調査)	丸山丸山通	1996年01月 - 02月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
76	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1996年01月 - 02月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
77	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1996年01月 - 02月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
78	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1996年01月 - 02月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
79	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1996年01月 - 02月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集
80	丸山丸山通	丸山丸山通	丸山丸山通	1996年01月 - 02月	鶴一(女)・葛島 (丸山丸山集)	第35集

Tab.1 筑後市内埋蔵文化財発掘調査一覧表(1) (平成12年4月1日現在)

通称No.	旧通称名	新通称名	所在地	調査時期	通称の時代・性格(特記事項)	備考
61	羽衣中道通称(第2次調査)	羽衣中道通称(第2次調査)	長狭大字羽衣中道	1996年04月-06月	奈良・鳥居(幣式住居など)	
62	福入中道通称	福入中道通称	福入中道通称	1996年04月-07月	中津・(磯崎など)	第11巻
63	福田内道通称	福田内道通称	福田内道通称	1996年07月	上津・(磯崎など)	第25巻
64	津島南道通称(第1次調査)	津島南道通称(第1次調査)	津島南道通称	1996年07月	中津・(磯崎など)	第21巻
85	本陣村ノ内通称(第1次調査)	本陣村ノ内通称(第1次調査)	本陣村ノ内通称	1996年07月-08月	奈良・(磯崎など)	
86	高江キリト通称	高江キリト通称	高江キリト通称	1996年08月-09月	奈良・磯崎・(磯崎など)	第32巻
87	井原野ノ内通称	井原野ノ内通称	井原野ノ内通称	1996年09月-11月	中津・(磯崎など)	第29巻
88	福田大平道通称(第1次調査)	福田大平道通称(第1次調査)	福田大平道通称	1996年09月-12月	磯崎・中津・鳥居(磯崎・土屋・磯崎など)	第25巻
90	福田西道通称	福田西道通称	福田西道通称	1996年09月-11月	古橋・鳥居(磯崎住居など)	第25巻
90	常成目付道通称(第1次調査)	常成目付道通称(第1次調査)	常成目付道通称	1996年09月-12月	奈良・(磯崎など)	
91	福田野道通称	福田野道通称	福田野道通称	1996年11月-12月	不明・(磯崎など)	第25巻
92	若菜大平道通称(第2次調査)	若菜大平道通称(第2次調査)	若菜大平道通称	1996年11月-12月	中津・近津・(磯崎など)	
93	若菜北平道通称(第1次調査)	若菜北平道通称(第1次調査)	若菜北平道通称	1996年12月	奈良・中津・鳥居(磯崎・土屋など)	
94	磯崎島内道通称	磯崎島内道通称	磯崎島内道通称	1996年12月	奈良・古橋・(磯崎住居など)	第33巻
96	常成北平道通称(第2次調査)	常成北平道通称(第2次調査)	常成北平道通称	1997年01月-05月	奈良・中津・鳥居(磯崎・土屋など)	
97	福田中ノ原通称(第2次調査)	福田中ノ原通称(第2次調査)	福田中ノ原通称	1997年02月-03月	磯崎・中津・鳥居(磯崎住居など)	
98	本下内道通称	本下内道通称	本下内道通称	1997年02月	中津・鳥居(磯崎住居など)	第33巻
99	福田中ノ原通称(第1次調査)	福田中ノ原通称(第1次調査)	福田中ノ原通称	1997年02月	中津・鳥居(磯崎住居など)	
97	古島磯崎通称(第1次調査)	古島磯崎通称(第1次調査)	古島磯崎通称	1997年04月-07月	磯崎・奈良・鳥居(磯崎住居など)	第33巻
101	大宮大門口通称	大宮大門口通称	大宮大門口通称	1997年04月-10月	古橋・中津・鳥居(磯崎・土屋など)	第33巻
102	津島北平道通称	津島北平道通称	津島北平道通称	1997年05月-06月	近津・(磯崎など)	
109	常成ノ内通称	常成ノ内通称	常成ノ内通称	1997年05月-06月	奈良・鳥居	
113	若菜北平道通称	若菜北平道通称	若菜北平道通称	1997年06月-07月	奈良・中津・鳥居(磯崎など)	
124	福田中ノ内通称(第2次調査)	福田中ノ内通称(第2次調査)	福田中ノ内通称	1997年06月-09月	奈良・鳥居(磯崎住居など)	第22巻
105	本陣村ノ内通称(第2次調査)	本陣村ノ内通称(第2次調査)	本陣村ノ内通称	1997年07月-12月	奈良・鳥居(磯崎など)	
106	津島北平道通称	津島北平道通称	津島北平道通称	1997年08月-09月	奈良・(磯崎など)	第21巻
107	漢口北平道通称	漢口北平道通称	漢口北平道通称	1997年08月	中津・(磯崎など)	第36巻
108	常成ノ内通称	常成ノ内通称	常成ノ内通称	1997年08月-10月	奈良・(磯崎など)	第36巻
109	常成内道通称	常成内道通称	常成内道通称	1997年08月	不明・(磯崎など)	
110	常成野ノ内通称	常成野ノ内通称	常成野ノ内通称	1997年10月	不明・(磯崎など)	
111	津島南道通称(第2次調査)	津島南道通称(第2次調査)	津島南道通称	1997年10月	奈良・古橋・鳥居(磯崎など)、中津・(磯崎)	第21巻
112	本陣伊勢ノ内通称	本陣伊勢ノ内通称	本陣伊勢ノ内通称	1997年10月-11月	奈良・(磯崎)	第29巻
113	志保内道通称	志保内道通称	志保内道通称	1997年10月-11月	磯崎・中津	
114	津島北平道通称	津島北平道通称	津島北平道通称	1997年10月-11月	奈良・古橋・鳥居(磯崎など)	第21巻
115	大宮北平道通称	大宮北平道通称	大宮北平道通称	1997年10月-11月	奈良・(磯崎)	第30巻
116	大宮今町通称	大宮今町通称	大宮今町通称	1997年10月-11月	奈良・中津・(磯崎、磯崎など)	
120	志保の内道通称	志保の内道通称	志保の内道通称	1997年11月	不明・(磯崎)	
181	志保内道通称	志保内道通称	志保内道通称	1997年11月	不明・(磯崎)	
182	若菜北平道通称	若菜北平道通称	若菜北平道通称	1997年11月-12月	磯崎・中津	第29巻
118	志保ノ内通称	志保ノ内通称	志保ノ内通称	1997年11月-12月	磯崎・(磯崎外野、中津・(磯崎など))	第27巻
119	志保ノ内通称	志保ノ内通称	志保ノ内通称	1997年11月-12月	奈良・中津・(磯崎など)	
121	志保ノ内通称(第1次調査)	志保ノ内通称(第1次調査)	志保ノ内通称	1997年11月-1998年03月	磯崎・(磯崎外野、近津・(磯崎など))	第27巻
120	志保ノ内通称	志保ノ内通称	志保ノ内通称	1997年11月	不明・(磯崎)	第27巻
121	常成野中道通称	常成野中道通称	常成野中道通称	1997年12月	不明・(磯崎)	第27巻
122	志保ノ内通称(第2次調査)	志保ノ内通称(第2次調査)	志保ノ内通称	1997年12月	磯崎・中津	第27巻
123	志保ノ内通称	志保ノ内通称	志保ノ内通称	1997年12月-1998年02月	中津・鳥居(磯崎など)	第30巻
124	志保ノ内通称	志保ノ内通称	志保ノ内通称	1998年01月	近津・(磯崎など)	第30巻
125	新渡大丸通称	新渡大丸通称	新渡大丸通称	1998年01月	近津・(磯崎など)	第30巻
126	尾島下町通称	尾島下町通称	尾島下町通称	1998年01月	中津・磯崎	
127	常成ノ内道通称	常成ノ内道通称	常成ノ内道通称	1998年01月-02月	奈良・鳥居(磯崎)	第29巻
128	志保ノ内通称(第1次調査)	志保ノ内通称(第1次調査)	志保ノ内通称	1998年01月-02月	奈良・中津・(磯崎など)	第27巻
129	福田大平道通称(第2次調査)	福田大平道通称(第2次調査)	福田大平道通称	1998年01月-02月	近津・(磯崎など)	第30巻
130	福田代道通称	福田代道通称	福田代道通称	1998年02月	近津・(磯崎など)	第30巻
131	志保内道通称	志保内道通称	志保内道通称	1998年02月	磯崎・近津・(磯崎・土屋など)	
132	尾島磯崎通称	尾島磯崎通称	尾島磯崎通称	1998年03月	磯崎・中津・(土屋、磯崎など)	
133	尾島磯崎通称	尾島磯崎通称	尾島磯崎通称	1998年03月-04月	中津・(磯崎など)	第27巻
135	-	大島磯崎通称(第2次調査)	大島磯崎通称	1998年05月-06月	磯崎・奈良・鳥居	第24巻
136	-	大島磯崎通称(第3次調査)	大島磯崎通称	1998年05月-06月	磯崎・奈良・鳥居(磯崎住居など)	
137	-	本陣ノ内道通称(第1次調査)	本陣ノ内道通称	1998年07月	奈良・鳥居(磯崎など)、中津・(磯崎)	
138	-	本陣ノ内道通称	本陣ノ内道通称	1998年07月-10月	奈良・鳥居(磯崎)	第33巻
139	-	志保ノ内道通称	志保ノ内道通称	1998年09月-10月	古橋・(磯崎など)	第31巻
140	-	上北高平道通称(第2次調査)	上北高平道通称	1998年09月-10月	磯崎磯崎(古橋)	
141	-	本陣ノ内道通称(第1次調査)	本陣ノ内道通称	1998年09月-10月	中津・鳥居(磯崎、磯崎など)	第34巻
142	-	福田野中道通称(第1次調査)	福田野中道通称	1998年09月-10月	磯崎・(磯崎など)	第36巻
143	-	本陣ノ内道通称(第2次調査)	本陣ノ内道通称	1998年10月-11月	奈良・鳥居(磯崎、磯崎など)	第34巻
144	-	福田野中道通称(第2次調査)	福田野中道通称	1998年10月-11月	磯崎・中津・鳥居(磯崎住居、磯崎など)	第34巻
145	-	本陣ノ内道通称(第2次調査)	本陣ノ内道通称	1998年11月	中津・近津・鳥居(磯崎・土屋など)	第34巻
146	-	福田野中道通称(第1次調査)	福田野中道通称	1998年11月-12月	磯崎・(磯崎)	
147	-	福田野中道通称(第2次調査)	福田野中道通称	1998年11月-1999年02月	古代磯崎	第36巻
148	-	志保ノ内道通称	志保ノ内道通称	1998年12月	奈良・中津・(磯崎住居、磯崎など)	
149	-	本陣ノ内道通称(第3次調査)	本陣ノ内道通称	1998年12月	磯崎(磯崎)	
150	-	福田野中道通称	福田野中道通称	1998年12月-1999年02月	古代磯崎	第36巻
151	-	福田野中道通称	福田野中道通称	1998年12月-1999年03月	奈良・(磯崎住居など)	第36巻
152	-	福田野中道通称	福田野中道通称	1999年02月	磯崎・(磯崎など)	第36巻
153	-	福田野中道通称(第4次調査)	福田野中道通称	1999年02月-03月	磯崎・古橋・鳥居(磯崎住居、磯崎など)	第36巻
154	-	常成野中道通称(第3次調査)	常成野中道通称	1999年02月-03月	奈良・中津・鳥居(磯崎、磯崎など)	第34巻
155	-	福田野中道通称(第3次調査)	福田野中道通称	1999年04月-05月	磯崎・(磯崎外野など)、近津・中津・(磯崎)	
156	-	津島磯崎通称	津島磯崎通称	1999年05月	奈良・中津・鳥居(磯崎、磯崎など)	第33巻
184	-	常成野中道通称	常成野中道通称	1999年07月-08月	奈良・鳥居(磯崎住居など)	
185	-	上北高平道通称(第2次調査)	上北高平道通称	1999年07月-08月	奈良・古橋・中津・近津・鳥居(磯崎・土屋など)	第28巻
186	-	上北高平道通称	上北高平道通称	1999年09月-11月	磯崎・奈良・中津・(磯崎・土屋など)	第33巻
187	-	福田野中道通称	福田野中道通称	1999年09月-03月	中津・近津・(磯崎)	

Tab.2 筑後市内埋蔵文化財発掘調査一覧表(2)(平成12年4月1日現在)

注:この一覧表には1970年に福岡県教育委員会が九州縦貫自動車道の建設に際し大字久志字大地田で実施した大地田遺跡は記載されていない。  
(原 和彦・他 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 II」 福岡県教育委員会 1971)

# 第3章 水田下平霊石遺跡の調査

## 1 調査概要

水田下平霊石遺跡は筑後市大字水田下平霊石に位置する。調査区のすぐ西側には県道富久・瀬高線が縦走り、調査前は米麦の二毛作が行われる水田であった。調査期間は平成10年9月21日～10月10日である。調査は16-1号支線用排水路の建設に伴い実施された。調査区は当初3m幅の水路として調査区を設定したが、実際は2m幅の規模の小さいものであったことから設定部分の東側は遺構の確認に留め、実際に水路の構造物が設けられる西側部分のみを調査した。調査面積は135㎡である。遺構は石灰色の粘土に掘り込まれており、遺構の埋土は主に暗灰色である。また、調査区北側ではクリークが確認されたが時間的な余裕がなく、重機による掘り下げを行った。クリークから出土した遺物は陶磁器・現代瓦・ガラス片・焼きヌカや竹製品であり、近現代を遡るものではなかったため、遺構としては認識せず作図なども行わなかった。

## 2 遺構と遺物

水田下平霊石遺跡での調査では、溝状遺構2条、溝状の溜まり状土壇1、柱穴多数を確認した。柱穴群の埋土は色調が似通っており、建物の復元は困難であった。遺物としては弥生土器片、土師器などが出土した。

### 溝状遺構

#### SD01 (Fig. 7・9)

調査区の南側で確認された遺構で、北側にはSX03が位置する。南北方向に走っており、調査区からは長さ約12mほどを検出した。幅は南側で不規則な凹凸を有するため約1.0～1.5m、深さ約0.20～0.25m、断面形は北側で部分的に1～3段掘り、南側でも部分的に1～2段掘りと不定形であるが、全体に緩やかなU字形をもつ。その段差はきわめて小さいものである。埋土 (Fig. 7) はレンズ状の自然堆積であり、全て粘土によるものである。

遺物としては弥生土器片、土師器片、黒曜石・サヌカイトの剥片があるが、図化しえたものは少ない (Fig. 8)。1～4は亀ノ甲タイプの甕の胴部破片である。いずれも磨滅が激しい小破片である。9は弥生前期の甕の底部である。磨滅が激しく器面調整などは不明である。6は板付Ⅱ式の壺の肩部破片である。5は短頸壺の破片である。7は土師器の甕の口縁部である。磨滅が激しく調整などは全く不明であるが器壁は6mm、外側へと大きく反り返っている。土師器は小破片であり、時期を特定しうるものではない。

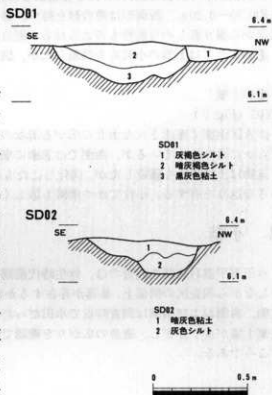


Fig. 7 SD01・02土層断面 (S=1/20)



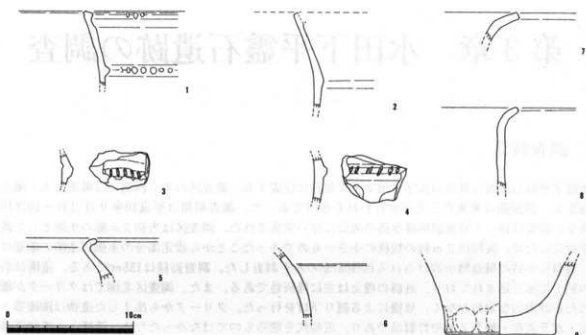


Fig. 8 水田下平雲石遺跡 出土遺物 (S=1/3)

#### SD02 (Fig. 7・9)

調査区南側で確認された遺構で、SD01・SX03の北側に位置する。北東から南西に向かって走っており調査区からは長さ約6.5mほどを検出した。幅は北東側へ行くほど広がっており約0.20~0.70m、深さ約0.15~0.20m、断面形は逆台形を持つ。埋土 (Fig. 7) は灰色の2層のシルトから成っており、埋土状況から掘り直しの可能性も考えられるが断言は出来ない。

遺物としては土器の小破片を採集したが、図化するものではなかった。

#### 不定形土塊

#### SX03 (Fig. 9)

調査区南側で確認された南北に広がる溝状の溜まり状土塊で、長さ約9m分を確認した。東側ではなだらかに落ち込んでいるが、西側では急激に底部へと落ち込んでいる。

遺物は土師器片を確認したが、図化したものは1点のみである (Fig. 8)。8は土師器の甕の口縁で、小さな返りを有する。小片でかつ磨減も激しく、時期を特定し得ないものであった。

### 3 小結

水田下平雲石遺跡の調査では、弥生時代前期後半の遺構がこの一帯にも広がる事が確認された。しかしながら調査区の関係上、集落が存在するかは結論が出せなかった。調査区が事業区域の西端であり、北側、西側および南側は調査時点で水田だったため踏査は行えず、東側でのみこれを行ったが、現代の廃棄土壌が多く存在し、遺跡の広がりを確認できなかった。今後、周辺地域での資料の増加が待たれるところである。

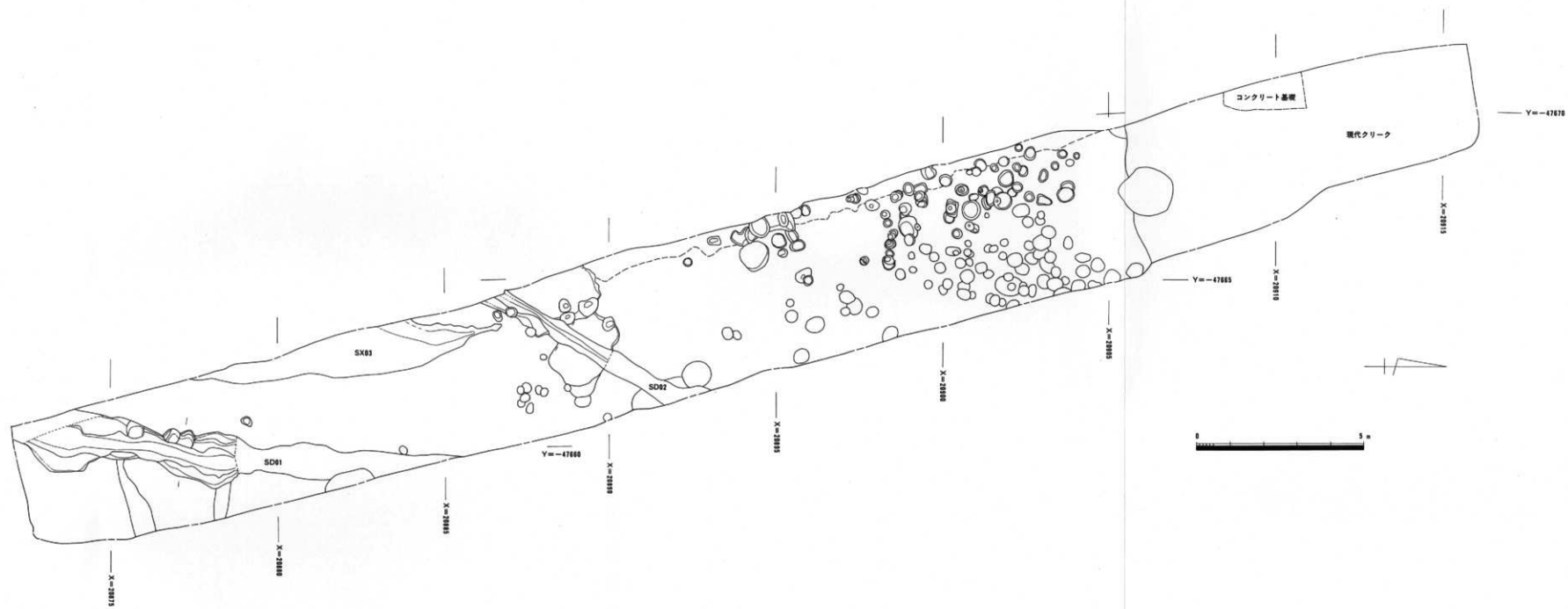


Fig. 9 水田下平霊石遺跡 全体図 (S= 1/100)

# 第4章 水田上平霊石遺跡 第2次調査

## 1 調査概要

水田上平霊石遺跡第2次調査区は大字水田上平霊石と大字常用字日田行の境に位置する。今回は水田地区の整備事業に伴う調査のため、便宜上、名称は水田上平霊石遺跡とした。調査期間は平成10年10月12日～11月6日である。調査前は米麦の二毛作が行われる水田であった。調査は16-1号支線用排水路の建設に伴い実施された。調査対象面積は約265m<sup>2</sup>である。遺構は橙色の粘質土に掘り込まれており、埋土は褐色系の粘質土である。また、このあたりはかなりの削平が行われており、調査前から一段低かった西側部分では、圃場整備事業側により行われた表土の除去面から遺構が確認できるほどであった。

遺構としては弥生時代の溝1条、廃棄土壌13基、中世～現代にかけての溝2条、小土壌多数を確認した。遺物は中近世の陶磁器、弥生中期の土器片、石器類が出土した。

## 2 中近世の遺構と遺物

### 溝状遺構

#### SD01 (Fig.10・11)

調査区の東端で確認された遺構で、調査前まで使用されていた用水路である。水田上平霊石遺跡第1次調査において調査区を二分する形で検出された中世水路の続きに当たる。遺構の東側は圃場整備事業側によりすでに水路の建設が進んでおり、調査は不可能であった。検出した幅は約2.4m、長さは約2.0m、深さ約1.7mである。土層観察の結果、SD01は計2回の掘り直しが行われており、最初に作られた溝(第1期、13～19層)を埋め戻した後に大規模な溝が作られ(第2期、4～8層)、その溝が自然埋没した後現代まで至る溝(第3期、1～2層)が作られている。また、溝の第2期には西側に浅いレンズ状を呈した小さな溝(SD01b、9～11・12層)が作られている。また、西側からはこれに接続するように溝状の遺構が走っている(SD01c)。これらは検出時点では分離できなかったため、SD01の一部として掘り下げを行った。

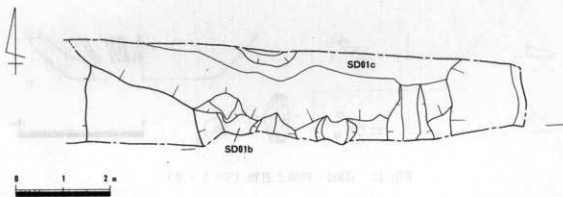


Fig.10 SD01群 (S=1/80)

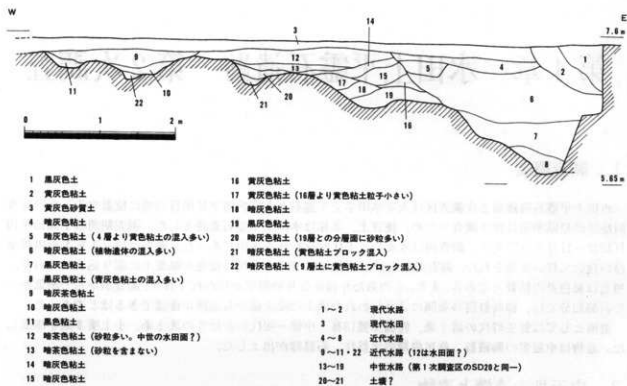


Fig. 11 SD01土層断面 (S=1/50)

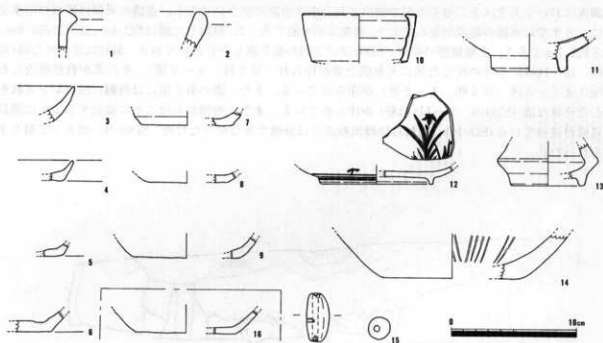


Fig. 12 SD01・10出土遺物 (S=1/3)

遺物としては弥生土器、瓦器碗、土師皿、土師碗、土製播鉢、土錘、青磁碗、陶器、磁器が出土した (Fig.12)。残念ながら層位的な取り上げは行っていない。1は弥生土器であるが、混入品である。2は瓦器碗の口縁部破片で、磨滅が激しいものである。土師皿・土師碗(3-9)はいずれも激しく磨滅した小破片であり、中には器種の特定が困難なものもある。時期の特定に至るものではない。青磁碗は10が淡青緑色、11は明青緑色の釉が施されている。12は磁器は染付の皿である。13は陶器は壺の底部破片で、外面と高台内面に乳茶色の釉が施されている。14は土製の播鉢で、4条1組の擦り目が施されている。15は土錘である。

#### SD10 (Fig.36)

調査区の東部分のほぼ中央部で検出された非常に浅い溝である。検出した幅は約1.9~2.2m、長さ約2.1m、深さ約0.1m、断面形は逆台形状を呈する。

この遺構からは土師器の杯が出土した (Fig.12-16) が、磨滅が激しく時期の特定に至るものではない。

### 3 弥生時代の遺構と遺物

#### 溝状遺構

##### SD08 (Fig.13)

調査区の東側で検出された溝で、幅約4.5~5.0m、長さ約2.2mを検出した。底面は凹凸が激しく、2方向に分かれたような形状をしているが、検出面では分離しえなかった。深さは0.17~0.26mである。水田上平雲石遺跡第1次調査区では弥生時代に属する溝が検出され、その続きの存在が想定されていた。SD08は第1次調査区の弥生時代の溝の延長上に位置するが、遺構の残り具合が悪く、また第1次調査区のものと同規模が一致しない。

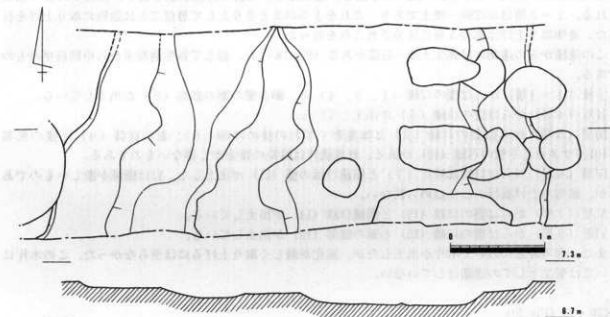


Fig.13 SD08 (S=1/40)

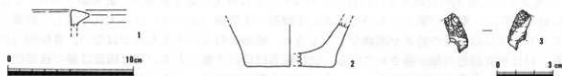


Fig.14 SD08出土遺物 (S=1/3・1/2)

この遺構からは弥生土器片と石鏃を出土した (Fig.14)。1は城ノ越式の甕の口縁で、断面は三角形状をしている。2は前期の甕の底部である。3は半透明黒曜石製の石鏃で、一方の脚部を欠如する。

#### 廃棄土壌

##### SK20 (Fig.15)

調査区のほぼ中央にあたるVグリットで検出された隅丸長方形の土壌で、長軸約2.1m、短軸約1.3m、深さ約0.45m。主軸の傾きはN-52°-Eを測る。埋土はレンズ状の自然埋没を呈し、大きく暗黒茶色土から成る上層部 (1~5層) と粘質土から成る下層部 (6・7層) とに2分されるが、遺物に大きな時期差などは認められない。

遺物には弥生土器と石製品がある (Fig.16)。

3は上層からの出土で、甕の口縁部細片である。中期前半。

下層出土土器のうち1は城ノ越式の甕の口縁部破片であるが、口縁部内面に突出部が見られる。7は脚台を取り付けた甕、もしくは鉢である。小片の出土の為、胴部の立ち上がりかたなどは不明である。8は甕の底部で、焼成後穿孔を施している。

##### SK25 (Fig.17)

AAグリットから検出された隅丸長方形の土壌で、一段のテラスを有する。長軸約1.8m、短軸約1.1m、深さ約0.45m。主軸の傾きはN-62°-Eを測る。埋土はレンズ状の自然堆積であり、粘質土により構成される。1~3層はほぼ同一埋土であり、これを1つのまとまりとして層位ごとに遺物の取り上げを行った。遺物取り上げは都合5層に区分されこれを行った。

この遺構からの遺物には弥生土器・石器がある (Fig.18・19)。総じて弥生前期末から中期前半のものである。

I層 (1~3層) からは甕の口縁 (1、3、4) と、脚台様の甕の底部 (8) が出土している。

II層 (4層) からは甕の口縁 (5) が出土している。

III層 (5層) からは甕の口縁 (2) と如意形くずれの甕の口縁 (6)、壺の底部 (9) と甕の底部 (10)、サヌカイト製の石鏃 (12) がある。底部破片は時期の特定がし得ないものである。

IV層 (6層) からは口縁部破片 (7) と屈曲口縁の甕 (11) が出土した。11は磨滅が激しいものであるが、底部の上げ底はあまり認められない。

V層 (7層) からは甕の口縁 (13) と磨滅口縁 (14) が出土している。

VI層 (8層) からは甕の口縁 (15) と壺の底部 (16) が出土している。

また、底辺付近において木片が出土したが、風化が激しく取り上げるには至らなかった。この木片については製品としての認識はしていない。

##### SK30・35 (Fig.20)

ともにAB-ACグリットから検出された土壌である。SK30は隅丸長方形を呈すると思われるが、南側をSK35に切られており、法量などは出せない。SK35は隅丸方形の土壌である。埋土はどちらもほぼレンズ状の自然堆積である。

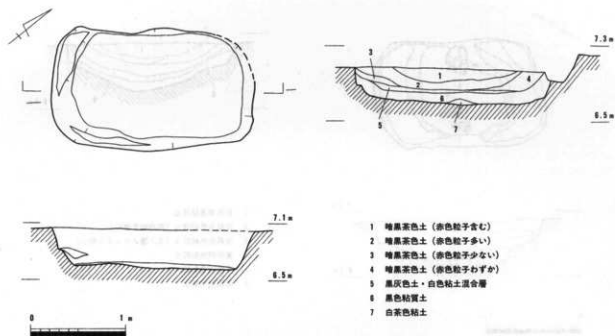


Fig.15 SK20 (S= 1/40)

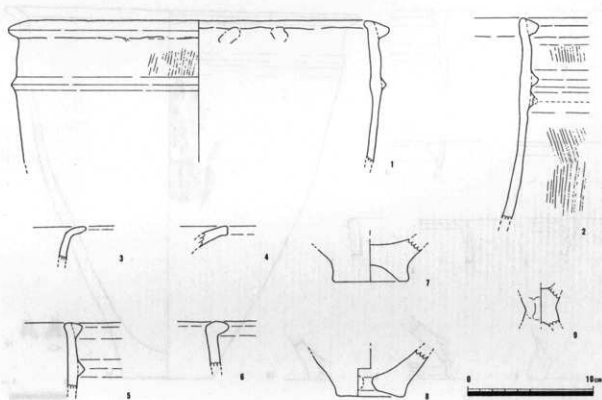


Fig.16 SK20出土遺物 (S= 1/3)

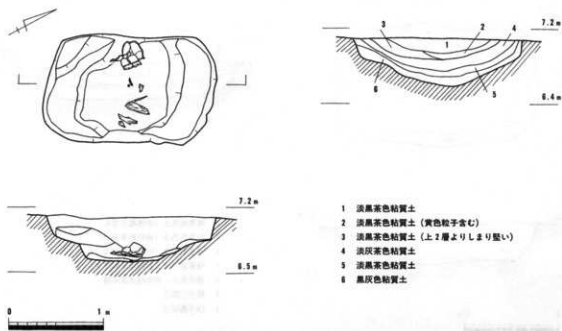


Fig.17 SK25 (S=1/40)

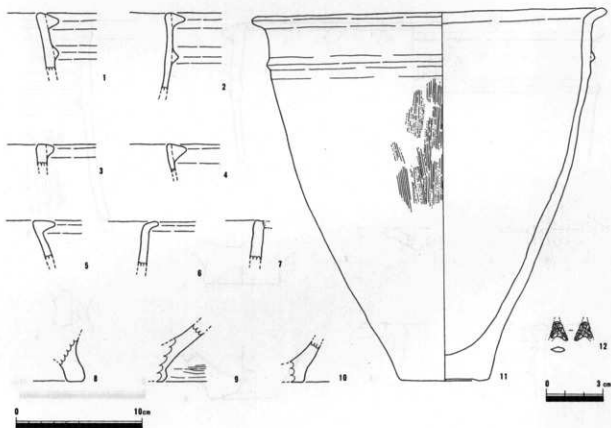


Fig.18 SK25 I~IV層出土遺物 (S=1/3・1/2)





Fig.19 SK25 V~VI層出土遺物 (S=1/3)

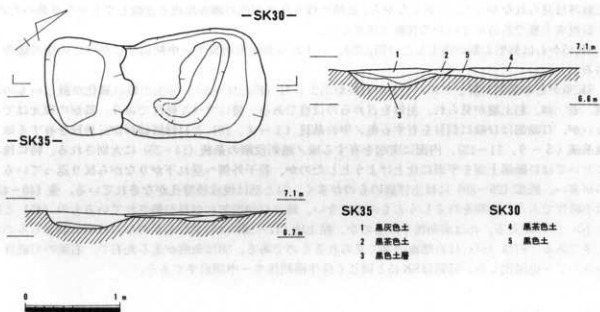


Fig.20 SK30・35 (S=1/40)

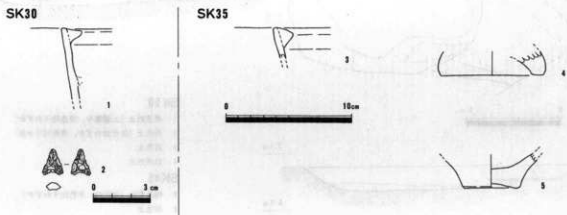


Fig.21 SK30・35出土遺物 (S=1/3・1/2)

SK30からは弥生土器 (Fig.21-1) と石鎌 (2) が出土した。弥生土器は中期前半のものである。

SK35からは弥生土器が出土した (Fig.21)。いずれも弥生土器の小片で、3は甕の口縁部細片、4は甕の底部、5は甕の底部である。時期は前期末から中期前半のものである。

#### SK45・50 (Fig.22)

共にAMグリットから検出された土壌である。SK45はSK50に北西側を切られ、南西側は調査区外へと広がるため、平面プランは不明である。SK50はほぼ隅丸長方形のプランを有し、長軸約2.0m、短軸約1.0m、深さ約0.25m。主軸の傾きはN-54°-Eを測る。

SK50は今回調査した廃棄土壌群の中でも土器廃棄が特に多く、また土器包含層 (3層) には炭化物が多く見受けられた。土器包含層より上位の埋土はレンズ状の自然堆積をしており、人為的な埋め戻しはなされていない。また、土器包含層よりも下位の埋土には焼土は見受けられず、遺構壁面にも火を受けた痕跡は見られなかった。しかしながら、遺構の残り具合が他の調査地点と比較してもかなり悪いため、土器焼成土壌であるかないかの判断は出来ない。

SK45からは弥生土器が出土した (Fig.23)。いずれも弥生前期後半～中期前半にかけての甕の破片である。

SK50からは弥生土器とサヌカイトの石核が出土した (Fig.24-26)。弥生土器は風化が激しいものの甕、壺、鉢、粘土塊が見られ、主体を占めるのは甕である。甕はすべて破片であり、器形の復元はできないが、口縁部は口縁に刻目を有する亀ノ甲の系統 (1~4、10) と口縁断面形が三角形を有する城ノ越系統 (5~9、11-13)、内面に突起を有する城ノ越新段階の系統 (14-25) に大別される。特に後者においては口縁部上面を平坦に仕上げようとしたのか、若干外側へ垂れ下がりがながら反り返っているものが多い。底部 (29-39) には上げ底のものが多く、34と35は焼成後穿孔がなされている。壺 (40-43) は小破片であり、時期を特定しうるものではない。鉢は口縁端部に刻目が施されているもの (45) と底部小片 (46) がある。45は前期後半のものか。粘土塊 (47-56) はいずれも手のひらの中に収まるものが大半である。石核 (57) は自然面の多く見られるものである。58は条痕が走る丸石で、石鎌の可能性があるので一応図化した。時期はSK45と同じく弥生前期後半～中期前半である。

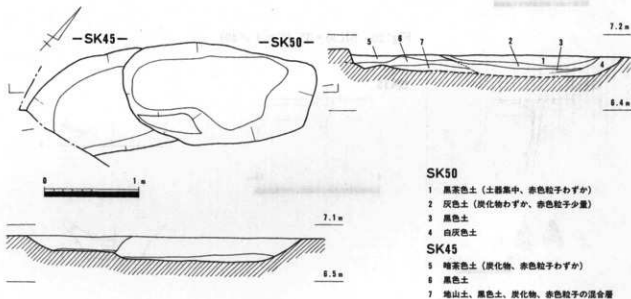


Fig.22 SK45・50 (S=1/40)

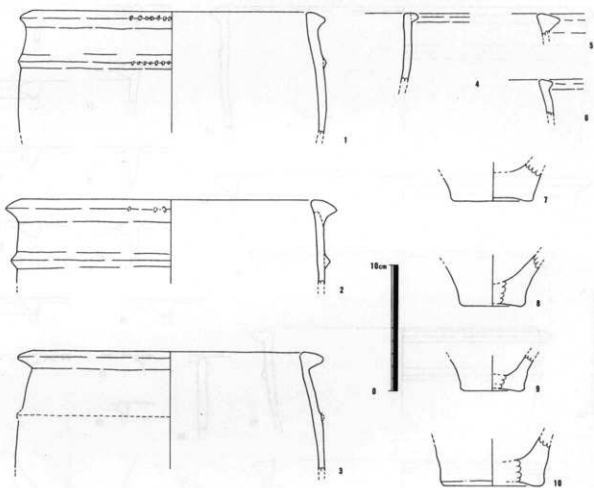


Fig. 23 SK45出土遺物 (S= 1 / 3)

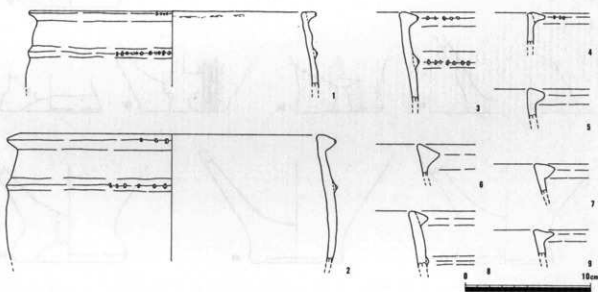


Fig. 24 SK50出土遺物 1 (S= 1 / 3)

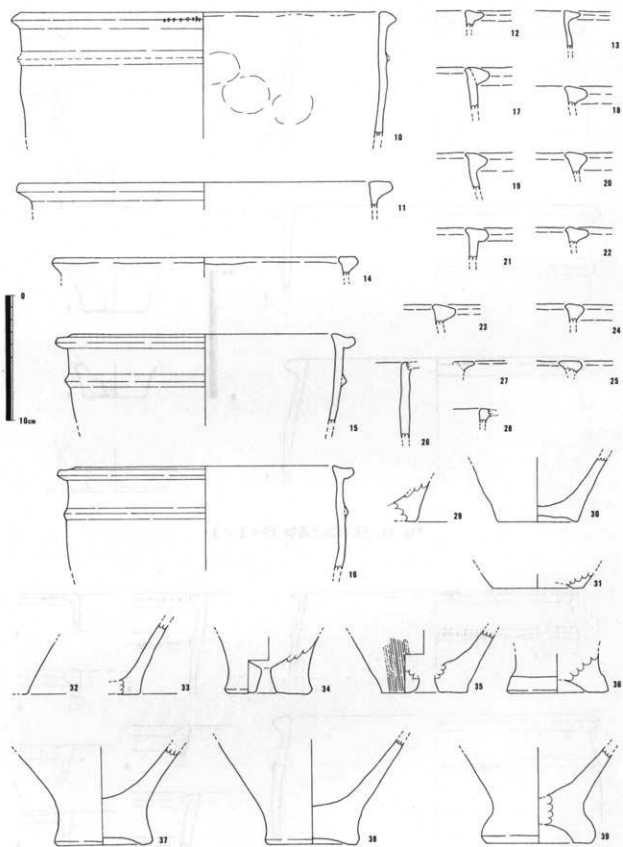


Fig.25 SK50出土遺物 2 (S= 1 / 3)

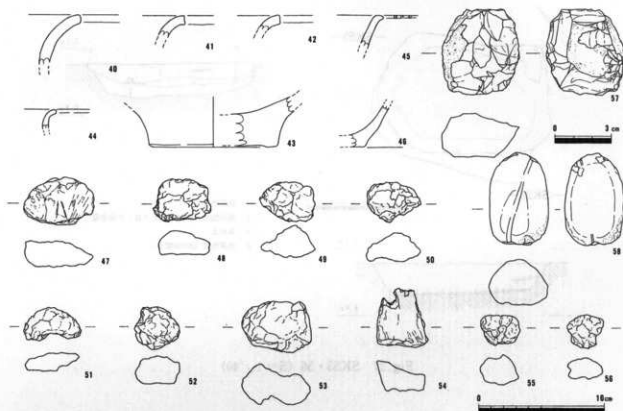


Fig.26 SK50出土遺物3 (S=1/3・1/2)

SK55・56 (Fig.27)

AMグリットから検出された土壌で、SK45・50の北側に位置している。SK55は隅丸長方形の土壌で、長軸約1.9m、短軸約1.2m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-38°-Eを測る。西側のコーナーに小さな段が設けられているが、用途は不明である。埋土はほぼレンズ状の堆積をしており、各層からの出土遺物には大きな差は認められない。SK56は大半をSK55によって破壊されており、検出されたのは南東部分のみである。遺構の壁面しか残っておらず、法量等は不明である。

SK55からは弥生土器、石器が出土した (Fig.28・29)。1は板付IIb式の小型の甕で、全体の磨滅が激しい。2～7は亀ノ甲式の甕の口縁部である。8～13は城ノ越式の甕の口縁部である。14～17は甕の底部破片であり、いずれも上げ底となっている。14には焼成後穿孔がなされている。18～20は壺の細片である。21は片岩製の磨製石鏃、22は尖頭器状のサヌカイトである。

SK56からも若干の弥生土器と石が出土した (Fig.30)。1、2は城ノ越式の甕の口縁部細片である。3は円礫であるが、両側面に加工と思われる痕跡があり、石錘と考えている。

そのほかの土壌

SK60・65 (Fig.36)

AQグリットから検出された土壌である。前述の廃棄土壌群と同じ類の遺構である可能性もあるが、その一部分しか掘り下げていないため、小土壌として取り扱った。SK60はSK65に切られており、SK65は調査区の外へと広がっている。

SK60からは城ノ越式新相の甕の口縁部を (Fig.31-1)、SK65からは城ノ越式の甕の口縁部 (2) を出土した。また両者を検出中に刻目突帯を有する甕の胴部小片 (3) と城ノ越式の甕の底部 (4) を採集している。

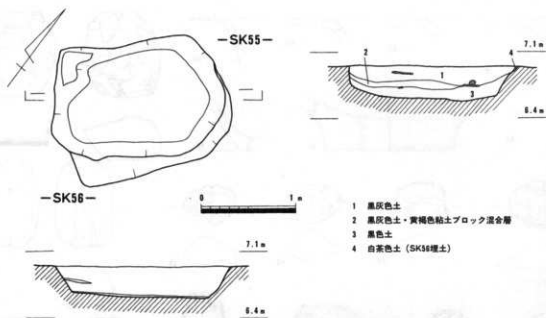


Fig.27 SK55・56 (S=1/40)

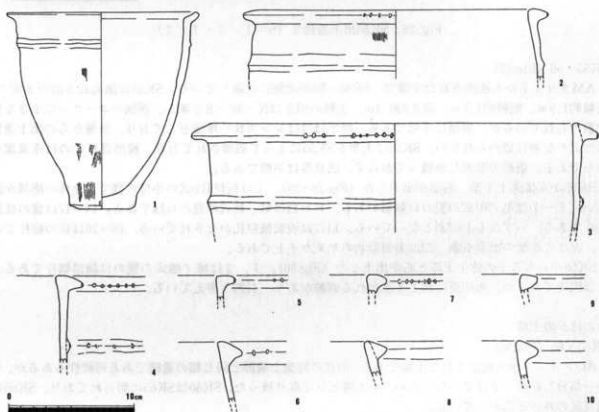


Fig.28 SK55出土遺物1 (S=1/3)

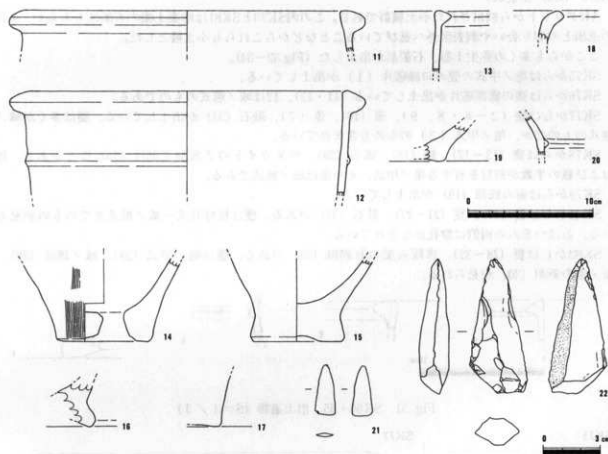


Fig.29 SK55出土遺物 2 (S=1/3・1/2)

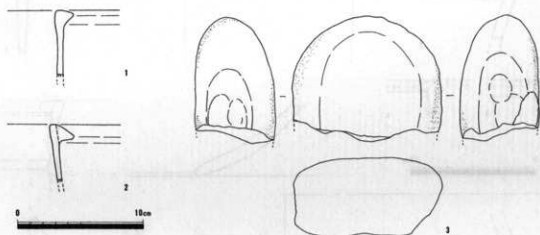


Fig.30 SK56出土遺物 (S=1/3)

SK70～80群 (Fig.36)

ARグリットから検出された小土壙群である。この内SK78とSK81は廃棄土壙の可能性もあるが、多数の遺構との切り合いや調査区外へ延びていることなどからこれらも小土壙とした。

ここからも多くの弥生土器、石製品が出土した (Fig.32～34)。

SK75からは亀ノ甲式の甕の口縁破片 (1) が出土している。

SK76からは甕の底部破片が出土している (11・12)。12は城ノ越式のものである。

SK77からは甕 (2～6・8・9)、壺 (10)、蓋 (7)、敲石 (34) が出土している。甕は多くが城ノ越式のものだが、亀ノ甲式 (2) のものも含まれている。

SK78からは甕 (13～17)、鉢 (18)、砥石 (36)、サヌカイトの2次加工剥片 (35) などがある。鉢および甕の半数が刻目を有する亀ノ甲式、その他は城ノ越式である。

SK79からは壺の底部 (19) が出土している。

SK81からは蓋 (20)、甕 (21～27)、敲石 (37) がある。甕は板付Ⅱ式～城ノ越式までのものが見られる。蓋はつまみの両側に穿孔がなされている。

SK82からは甕 (28～32)、黒曜石製の有脚鎌 (38) がある。甕は亀ノ甲式 (28)、城ノ越式 (29)、城ノ越の新相 (30) が見られる。



Fig.31 SK60・65 出土遺物 (S=1/3)

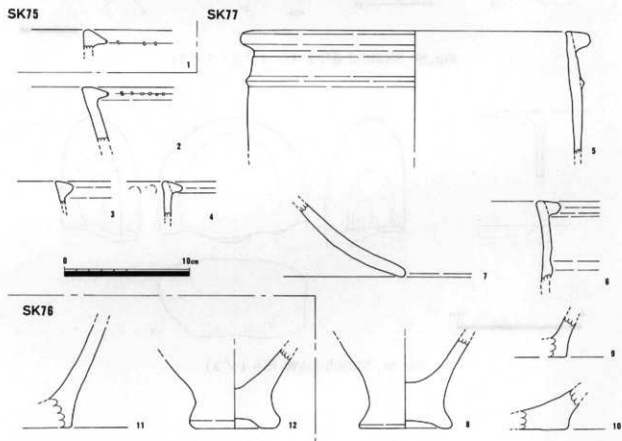


Fig.32 SK75・76・77 出土土器 (S=1/3)



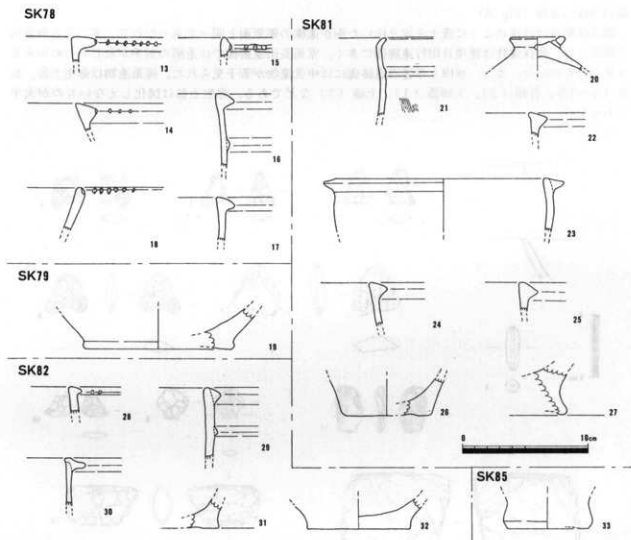


Fig.33 SK78・79・81・82・85 出土土器 (S = 1 / 3)

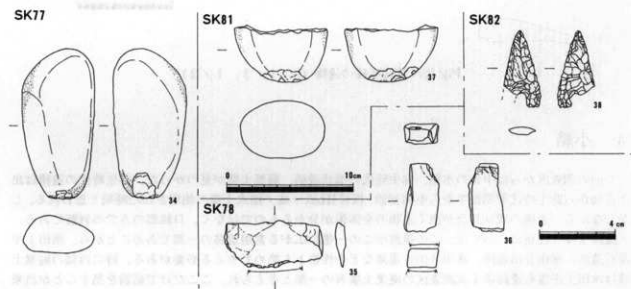


Fig.34 SK77・78・81・82 出土遺物 (S = 1 / 2、敲石は1 / 3)

周辺表採の遺物 (Fig.35)

調査区周辺は前述のように表土を取り除いた面が遺構の確認面と同一であったので、多くの遊離遺物を採集した。表採遺物は常用日田行遺跡側に多く、常用長田遺跡側では遺構の削平が激しいためあまり見られなかった。また、水田上平霊石遺跡側には中世遺物が若干見られた。採集遺物は弥生土器、石器 (4-12)、青磁 (2)、土師器 (1)、土錘 (3) などである。弥生土器は凶化しえないものが大半であった。

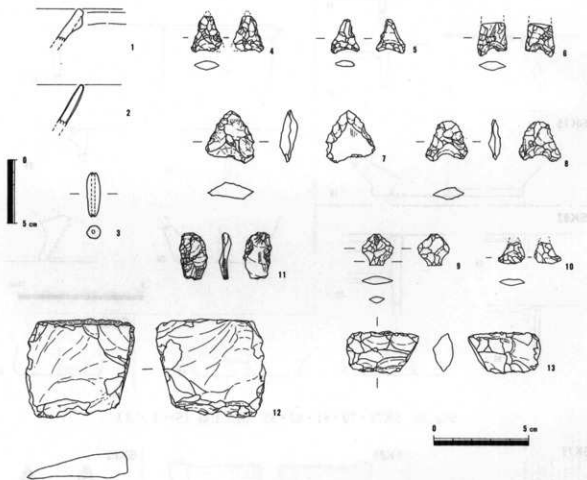


Fig.35 周辺表採の遺物 (S=1/3、1/2)

#### 4 小結

今回の調査区からは中世の水路、弥生時代の溝状遺構、廃棄土壌が見つかった。弥生時代の遺構は出土遺物から弥生時代前期後半から中期初頭、板付IIb式～城ノ越式土器の使用された時期と思われる。しかしながら、遺構の残り具合が悪く遺物の全体像が分かるものではなく、口縁部のみでの判断である。

遺跡全体の性格については、この遺跡がこの一帯に広がる常用遺跡の一部であることから、水田上平霊石遺跡、常用長田遺跡、常用日田行遺跡などの性格とも絡めて考える必要がある。特に西側の廃棄土壌は水田上平霊石遺跡第1次調査区の廃棄土壌列の一部と考えられ、ここだけで結論を出すことが出来ない。早い時期での周辺各遺跡の正式報告が待たれるところである。

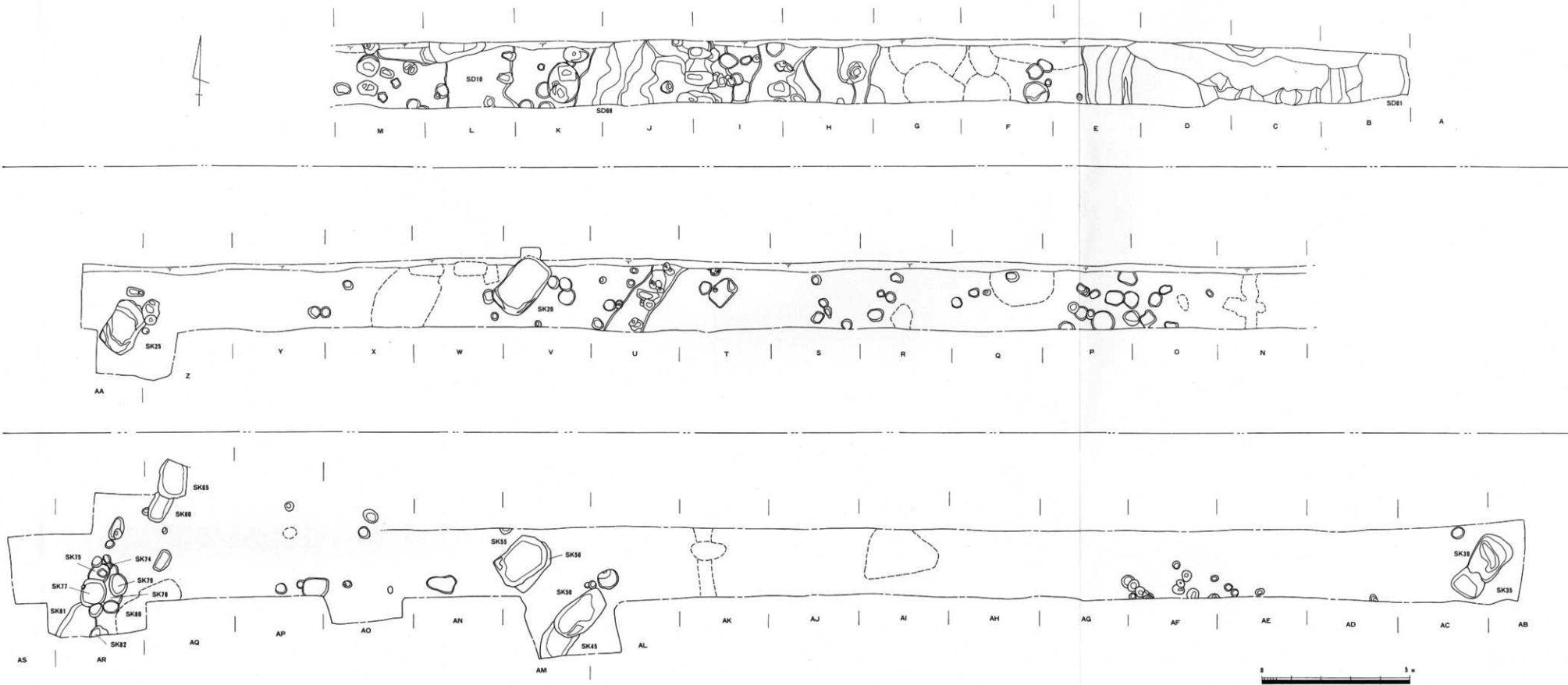


Fig. 36 水田上平靈石遺跡 第2次調査区 全体図 (S=1/100)

# 第5章 水田上仁良葉遺跡 第1次調査

## 1 調査概要

水田上仁良葉遺跡第1次調査区は筑後市大字水田字上仁良葉に位置する。北側には市立筑後中学校、水田山伏遺跡第1次調査区、南側には水田仁良葉遺跡第2次調査区、西側には水田上平壺石遺跡が存在する。調査前は米麦の二毛作が行われる水田であった。調査はポンプ場および貯水池の建設に伴い実施された。調査対象面積は約160㎡である。調査区は圃場整備事業側により表土が取り除かれており、深土からの掘り下げから開始された。調査期間は平成10年9月11日～10月28日である。調査区は北側の筑後中学校の敷地と比べてもかなりの高低差があり、かなりの削平を受けていると予想されたが、井戸2基、近世のクレーク1条、溝状遺構多数を検出した。遺物としては少量の土師器小片を採集したが、紛失してしまい、今回は紹介できない。

## 2 遺構

### 溝状遺構

SD05 (Fig.37・38)

調査区の中央部で検出された断面台形状の遺構で、調査区を東西に横断している。幅約0.50m、長さ約12mを検出した。埋土は黒灰色粘質土から成り、水流の痕跡は不明である。

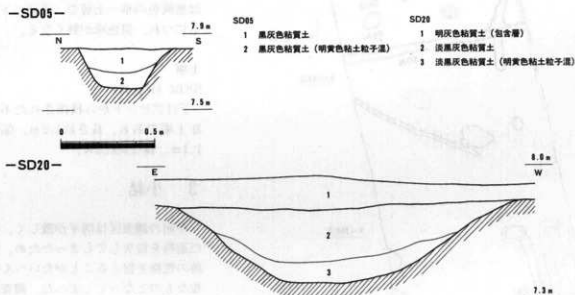


Fig.37 溝状遺構土層断面図 (S=1/20)

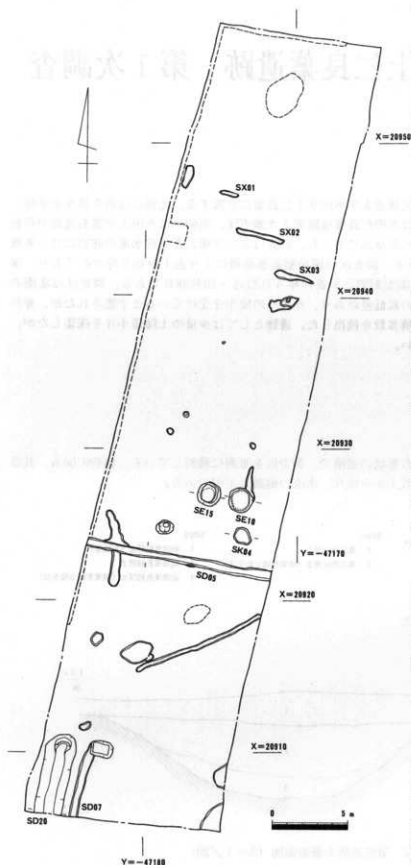


Fig.38 水田上仁良葉遺跡第1次調査区全体図 (S=1/250)

#### SD20 (Fig.37・38)

調査区の南側で検出された断面U字状の遺構で、調査区を北側へと延びている。幅約1.8m、長さ約5.5mを検出した。埋土は淡黒灰色粘質土から成り、レンズ状の自然堆積を呈する。水流の痕跡は不明である。この溝に対し、調査担当者は近代のクリークと判断している。

#### 井戸

#### SE10 (Fig.39)

D13グリットから確認された遺構で、平面プランは円形、堀方は上方にわずかに開く円筒形で、底部は丸く球形を呈する。径約1.8m、深さは約1.0mを測る。埋土は黒灰色の単一土層で、底部に下がるにつれ、黒色味が強くなる。

#### SE15 (Fig.39)

E13グリットから検出された遺構で、平面プランは円形、堀方は途中にテラスを有するものの上方に開く擋鉢型をし、底部は球形を呈する。径約1.7m、深さ約1.1mを測る。埋土は黒灰色の単一土層で、底部に下がるにつれ、黒色味が強くなる。

#### 土壇

#### SK04 (Fig.40)

F11グリットから検出された不定形土壇である。長さ約1.2m、幅約1.1m、深さ約0.2m。

### 3 小結

今回の調査区は削平が激しく、また遺物を紛失してしまったため、遺跡の性格を捉えることがたいへん困難なものとなってしまった。調査担当者によると、調査区北側の3条の溝は埋土が褐色系であり、近年の水田耕作によるものと判断している。また、遺構に関してはSD20と同様に

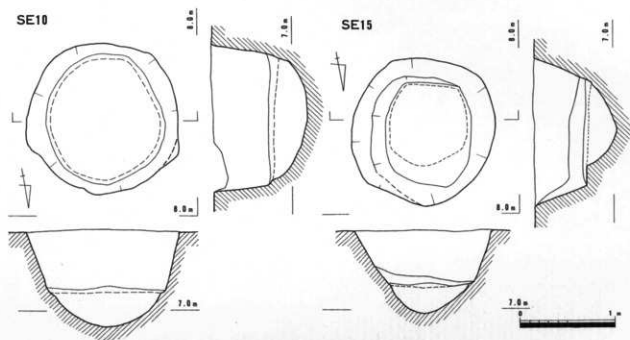


Fig.39 SE10・15 (S = 1/40)

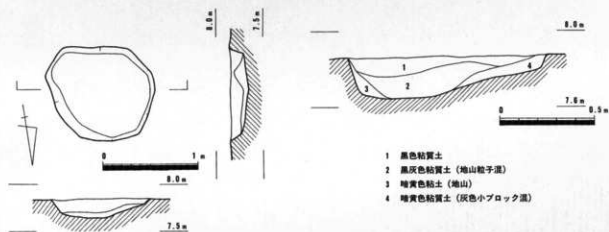


Fig.40 SK04 (S = 1/40・土層断面図はS = 1/20)

近世の所産と捉えられるが、井戸に関しては中世の後半まで時期が遅れそうだとのことであった。  
 いずれにしても現時点では比較対象となる調査例も少なく、結論を出すには至らない。周辺での調査例の増加が期待される。

# 第6章 水田上仁良葉遺跡 第2次調査

## 1 調査概要

水田上仁良葉遺跡第2次調査区は筑後市大字水田上仁良葉に位置する。北側には市立筑後中学校、水田上仁良葉遺跡第1次調査区、南側には常用ニラバ遺跡、西側には水田上平雲石遺跡が存在する。調査前は米麦の二毛作が行われる水田であった。調査は第16-2号支線排水路の建設に伴い実施された。調査対象面積は約491㎡、調査期間は平成10年10月26日～11月28日である。調査区は圃場整備事業例により表土が取り除かれており、深土からの掘り下げから開始された。調査の結果、近世のクリーク1条、中世の土壌1基、縄文時代の落とし穴1基、その他時期不明の土壌数基を検出した。

## 2 中～現代の遺構と遺物

### 溝状遺構

#### SD01 (Fig.41)

調査区の西側で検出された断面台形状の遺構で、調査区を南北に縦断している。幅約7.5m、深さ約0.9mを測り、断面形は西側に段を有するものの緩やかなU字状となる。埋土から東側に位置するSD21によって上部を攪乱されていることが分かる。SD01自体の埋土は灰色～黒灰色の粘質土によるもので、掘前時には強い臭気を伴っていた。

ここからは須恵器片、土師器、陶磁器、瓦など多くの遺物が出土した (Fig.42)。

1・2は水田焼の人形の型である。1は表面に当たり、「寿」と陽刻された皿を抱えた猫と思われる動物の型であろう。2については小片のため不明である。

3は土錐である。

4～6は土師質の鉢である。5については火鉢の可能性もある。

7・8は土師質の大甕である。

9は陶器の壺の口縁である。

10は陶器の大甕の底部である。

11は磁器のぐい飲みと思われる。

12～14は磁器の碗である。14はプリント柄で、内面に重ね焼きの痕跡が見られる。

15～17は磁器の皿である。15は文様を刻んだ後に青色釉を流している。16は内面に重ね焼き痕跡がある。17にも工具を用いた重ね焼き痕跡が見られるが、どのようなものが用いられたかは不明である。

18は磁器の盃である。内面に亀、外面には鶴と松が描かれている。

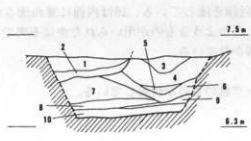
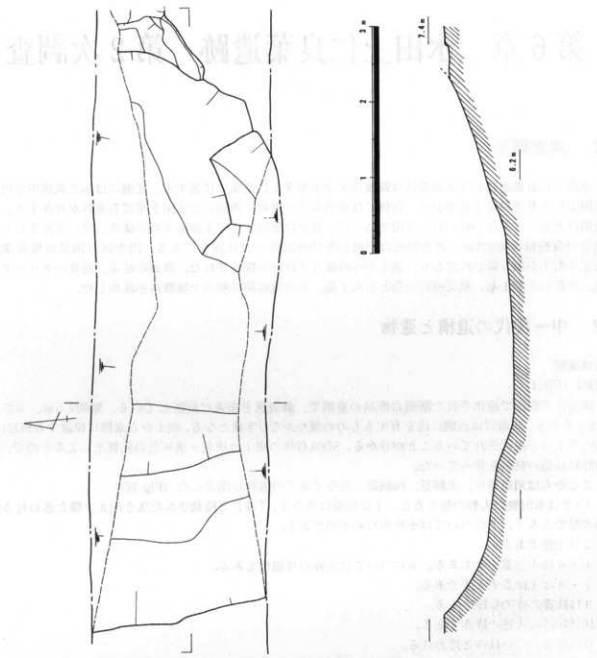
19はⅢ層から出土した磁器の皿の破片である。

瓦は型を用いて作られた平瓦で、赤く変色し、スラッグ状のものが付着している。

#### SD14 (Fig.46)

調査区東側で検出された溝状の土壌で、1次調査区のSD20の続きと考えられる。

遺物は陶器の小破片を1点採取したにすぎない。



- 1 暗茶灰色土
- 2 暗茶色土
- 3 暗茶灰色土
- 4 暗灰色土
- 5 暗灰色土 (植物遺体含)
- 6 暗灰茶色粘質土 (植物遺体含)
- 7 灰色粘質土 (植物遺体層状に堆積)
- 8 黒灰色粘質土 (腐植土)
- 9 灰褐色粘質土
- 10 灰色粘質土

Fig.41 SD01 (S= 1/50)





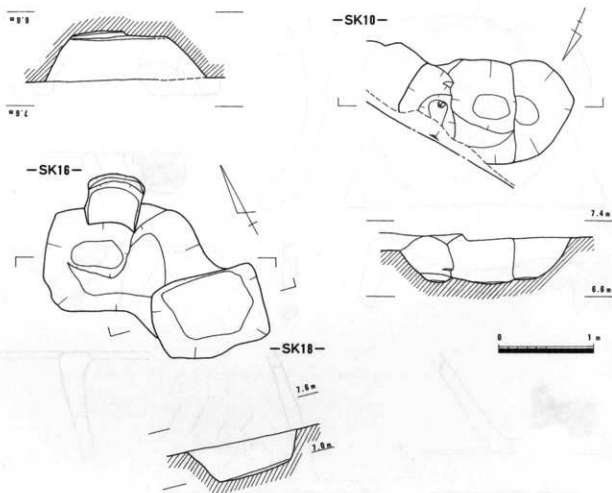


Fig.43 SK10・16・18 (S=1/40)

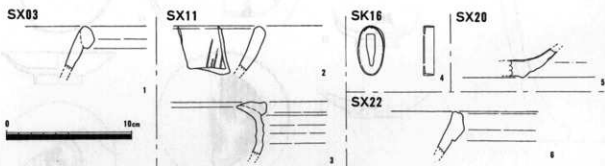


Fig.44 中世～現代土壌 出土遺物 (S=1/3)

土壌

SX03 (Fig.45)

調査区中央部で検出された土壌である。

遺物は土鍋 (Fig.44-1)、サヌカイト片が出土した。

SK10 (Fig.43)

調査区東端で確認された楕円形の土壌である。法量は長軸約1.8m、短軸約1.1m、深さ約0.5m。主軸の傾きはN-61°-Eを測る。底面の状況から複数の土壌の切り合いの可能性があるが、検出時点では確認できなかった。調査担当者は出土遺物の青磁碗をもってこの遺構を中世のものだと判断している。

遺物には青磁碗、須恵器片、土師器片、磁器片があるが、青磁碗以外は細片のため図化しえなかった。青磁碗は紛失している。

SX11 (Fig.46)

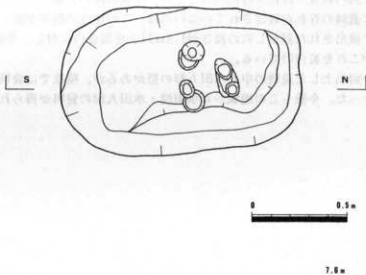
調査区東側で検出された遺構である。

遺物は土師器の播鉢 (Fig.44-2)、陶器の鉢 (3) の他、瓦器の播鉢、土師器片、陶磁器片が採集された。

SK16 (Fig.43)

調査区西側で確認された長方形の土壌であり、SK17を切り南端をSK18に切られている。法量は主軸部分で約1.7m、短軸は中央部で約1.1m、深さ約0.8m。主軸の傾きはN-61°-Wを測る。

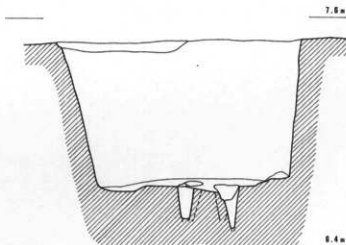
遺物には土鍋、留め金 (Fig.44-4)、須恵器片、瓦器片、陶磁器片、チャート、緑泥変岩がある。留め金は現代の包丁や鎌などの刃を柄に固定するときに使用されるものと同形状であり、腐食はあまり進んでいない。



SK18 (Fig.43)

調査区西側で確認された長方形の土壌で、SK16を切っている。法量は長軸約1.2m、短軸約0.9m、深さ約0.4m。主軸の傾きはN-78°-Wを測る。

遺物は須恵器片、土師器片、磁器片を出土したが図化しえなかった。



SX20 (Fig.46)

調査区西側、SK17の北側で検出された土壌である。

遺物には磁器の碗 (Fig.44-5)、土鍋片がある。

Fig.45 SK05 (S = 1/20)

SX22 (Fig.46)

調査区西側、SD01の西側で検出された土壌である。

遺物には土鍋 (Fig.44-6)、須恵器片、土師器片、青磁片がある。

### 3 縄文時代の遺構

落とし穴

SK05 (Fig.45)

調査区中央部で検出された長方形の土壌である。法量は長軸約1.3m、短軸約0.8m、深さ約0.8m。主軸の傾きは不明である。床面には4基の穴がある。それぞれ径約0.1m、深さ約0.2mを測る。

この遺構からは、遺物の出土はない。

### 4 小結

今回の調査では縄文時代の落とし穴、中世以降の土壌、クリークなどを確認した。縄文時代と中世の間に遺構の存在が確認されていないのは、この地点の削平が激しかったためであろう。市内で良好な状態で検出された落とし穴の深さが1.5m以上を測るのに対し、今回の調査事例が0.8mの深さであったことがこれを裏付けている。

今回出土した遺物の中に水田人形の型があるが、現在では資料の少ない水田人形にとって貴重な発見となった。今後もこの地域から水田焼・水田人形の資料が得られることが期待される。

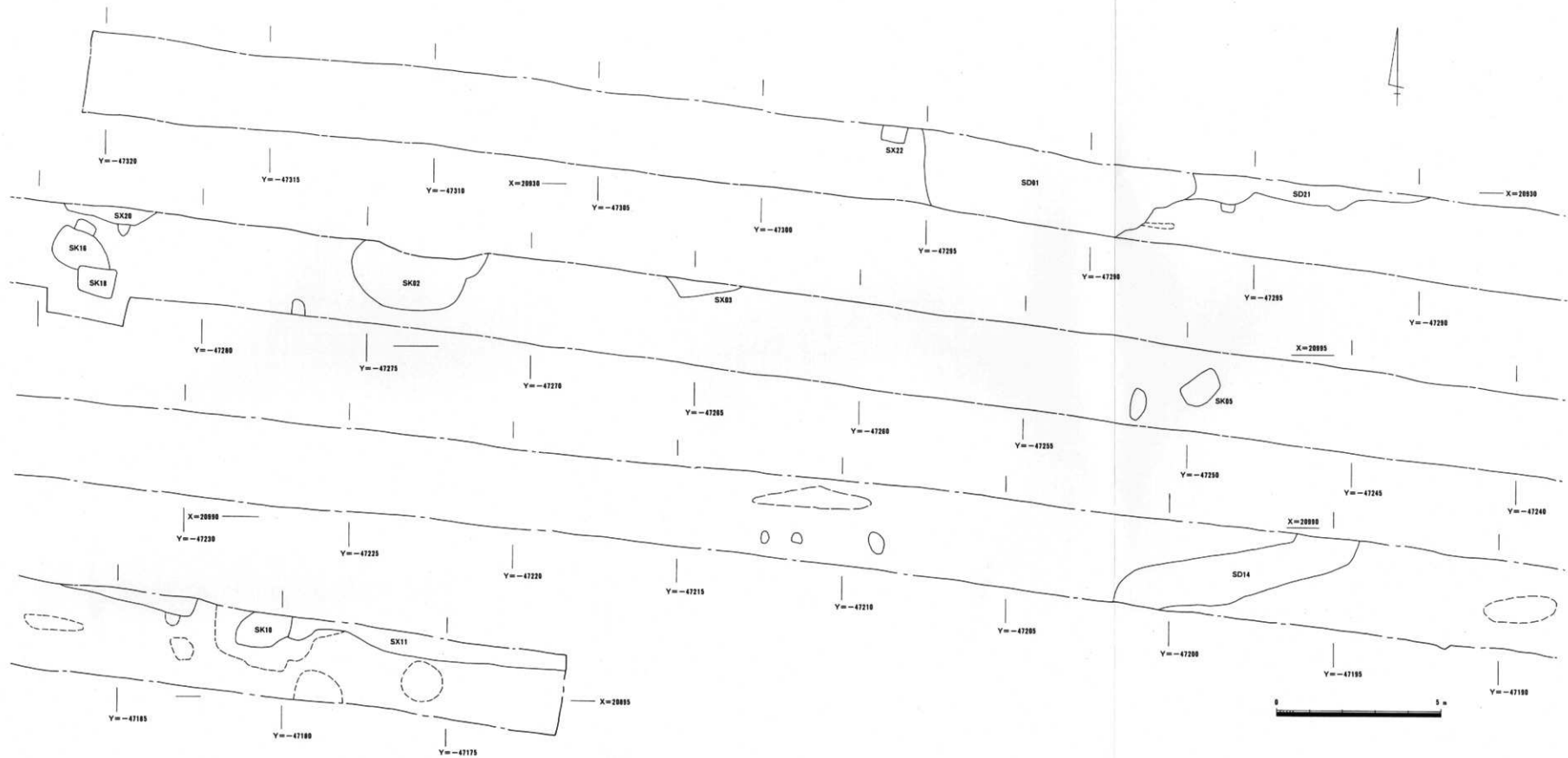


Fig. 46 水田上仁良葉遺跡 第2次調査区 遺構配置図 (S=1/100)

## 第7章 結語

### 1) 縄文時代の落とし穴について

水田上仁良遺跡第2次調査区では落とし穴が1基確認された。西部第2地区での落とし穴の調査事例は3調査区で4例がある。これらを矢部川流域の他の遺跡をからめて見ると、標高7m付近の水田正吹遺跡、標高7～10mの本遺跡と志野添遺跡でそれぞれ1基が確認された。しかし、標高10mほどの志西田遺跡では2基、標高15mに近い鶴田岸添遺跡第2次調査区では1遺跡で17基と数を増している。鶴田岸添遺跡第2次調査区の落とし穴は密集した状態である。

筑後市の中央部を整流する倉目川流域では、藤敷森ノ木遺跡第2次調査区、前津中ノ玉遺跡第2次調査区、田佛遺跡の3ヶ所で落とし穴が確認されている。この内前の2遺跡では1基のみが確認されたにすぎない。田佛遺跡では東側で2基、西側で5基が確認され、西側では等間隔の列状に配置されていることが指摘されている。報告者は「追い込み罠」に利用された可能性もあると想定している。

以上、落とし穴の配置について見てきたが、落とし穴の配置の状況が何の違によるものかまでは矢部川流域の遺跡のほとんどが断言できない状態である。今後の調査事例の増加が待たれる。

#### 【参考文献】

川達 昭人	「田佛遺跡」		1988	筑後市教育委員会
筑後市教育委員会・編	「筑後東部地区遺跡群II」	〔3〕	鶴田岸添遺跡 第2次調査	1995 筑後市教育委員会
小林 勇作・編	「筑後西部地区遺跡群II」	〔2〕	水田正吹遺跡の調査	2000 筑後市教育委員会

### 2) 水田人形の型について

水田人形の型はSD01(クリーク)の中より出土した。光窯(野町窯)の近藤光男氏によると、水田焼の窯跡の所在地と今回の調査地点とは距離があるため、破損したものを廃棄したと考えられる。

水田人形は水田焼の工人が伏見人形の製法に学び始めたと言われる。その製法は粘土を型にはめ、焼き上げた後に彩色を施すというもので、市北部の赤坂人形と製作技法は同じである。それどころか小型のものになると同じ形をしたものまで存在する。

赤坂人形が子供の玩具として広まったのに対し、水田人形は慶事に対する贈答品として用いられた。今回出土した型の中央部に「寿」の字が刻まれていたのはこのためだと思われる。しかしながら、現在では水田人形は生産されていない。型の一部は現在光窯(野町窯)の近藤光男氏が保存している。

#### 【参考文献】

右田乙次郎	「水田校区郷土史」	1981	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
立石 真二	「羽犬塚寺ノ輪遺跡」	2000	筑後市教育委員会

### 3) おわりに

今回の報告の中で注意したいものは水田上仁良遺跡第2次調査区から検出された廃棄土壌群である。これは水田上仁良遺跡第1次調査区から検出されたものと列をなすことが周辺遺跡の踏査からも確認されている。廃棄土壌群はこのほかに常用長田遺跡第2次調査区からも検出されている。未報告の2遺跡の廃棄土壌群は整理段階のため、比較検討ができなかった。これに関しては後日改めて検討される。

今回の調査では弥生時代の集落遺跡である常用遺跡群の広がりや空間の利用状況に関して貴重な情報を得ることができた。今後の報告の中でこれが少なからず生かされることを期待したい。

調査区	調査区	調査区	調査区
水田上仁良遺跡第1次調査区	水田上仁良遺跡第2次調査区	常用長田遺跡第1次調査区	常用長田遺跡第2次調査区
1000	1000	1000	1000

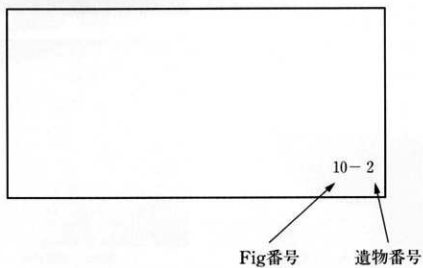
今回の調査では弥生時代の集落遺跡である常用遺跡群の広がりや空間の利用状況に関して貴重な情報を得ることができた。今後の報告の中でこれが少なからず生かされることを期待したい。

調査区	調査区	調査区	調査区
水田上仁良遺跡第1次調査区	水田上仁良遺跡第2次調査区	常用長田遺跡第1次調査区	常用長田遺跡第2次調査区
1000	1000	1000	1000

# PLATE

## 凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。







1 水田下平雲石遺跡 全景 (北から)



2 SD01 土層断面 (北から)



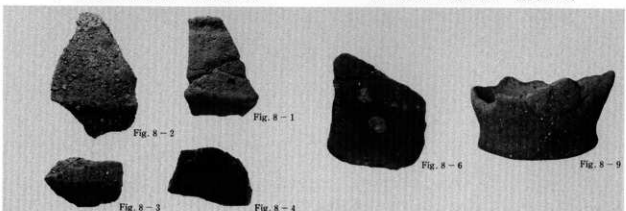
3 SD01 完掘状況 (北から)



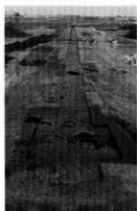
4 SD02 土層断面 (北東から)



5 SD02 完掘状況 (北東から)



6 水田下平雲石遺跡 出土遺物



1 水田上平雲石遺跡  
第2次調査区 全景 (西から)



2 SD01 土層断面 (北から)



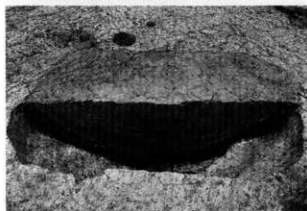
3 SD01 完掘状況 (東から)



4 SK20 土層断面 (西から)



5 SK20 完掘状況 (北西から)



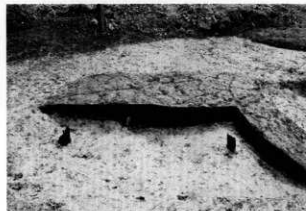
6 SK25 土層断面 (西から)



7 SK25 遺物出土状況 (南から)



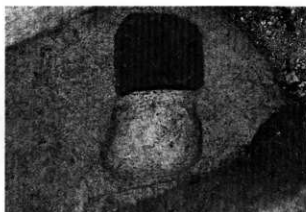
8 SK25 完掘状況 (東から)



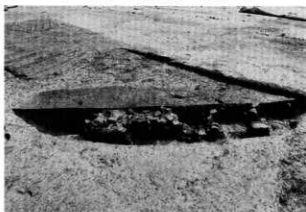
9 SK30 土層断面 (西から)



1 SK35 土層断面 (西から)



2 SK35 完掘状況 (南から)



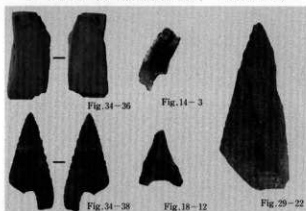
3 SK45・50 土層断面 (西から)



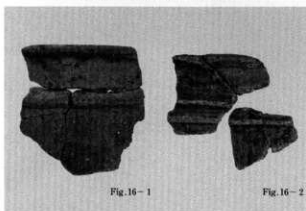
4 SK45・50 遺物出土状況 (北東から)



5 SK55 完掘状況 (北東から)



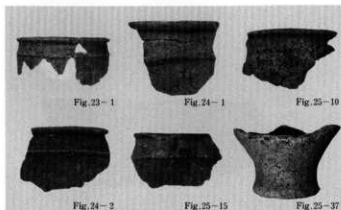
6 水田上平曇石遺跡第2次調査区 出土石器



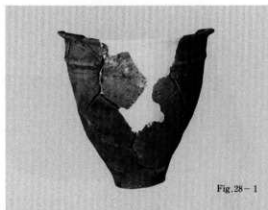
7 SK20 出土遺物



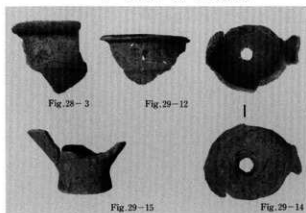
8 SK25 出土遺物



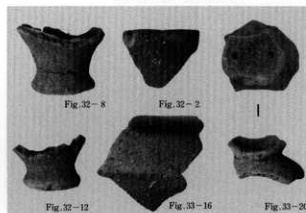
1 SK45・50 出土遺物



2 SK55 出土遺物



3 SK55 出土遺物

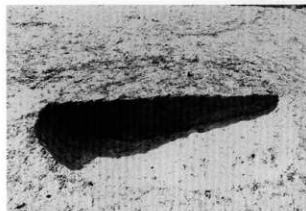


4 SK70~80群 出土遺物

5 水田上仁良葉遺跡第1次調査区  
全景 (上から)



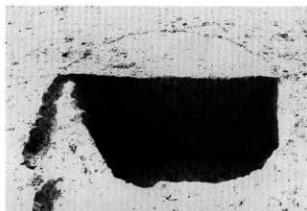
6 SD05 土層断面 (西から)



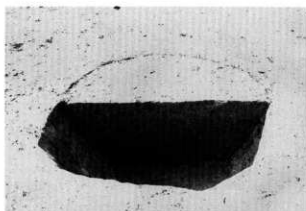
7 SK04 土層断面 (北から)



8 SK04 完掘状況 (北から)



1 SE10 土層断面 (北から)



2 SE15 土層断面 (北から)



3 SE10 完掘状況 (北から)



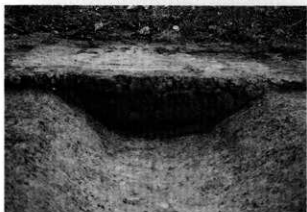
4 SE15 完掘状況 (北から)



5 SE10 断ち割り状況 (北から)



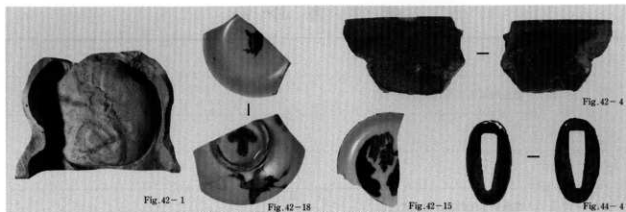
6 SE15 断ち割り状況 (北から)



7 SD20 土層断面 (北から)



8 SD20 完掘状況 (南から)



1 水田上仁良葉遺跡 第2次調査区 出土遺物

## 筑後西部第2地区遺跡群(IV)

筑後市文化財調査報告書  
第34集

平成13年3月31日

発行 筑後市教育委員会  
筑後市大字山ノ井898

印刷 大同印刷株式会社  
佐賀市天神一丁目1番32号